

ほうおんじよう  
報恩抄

日蓮之を撰す  
これ せん

そ 夫れ老狐は塚をあとにせず。白亀は毛宝が恩をほうず。畜生すらかくのごとし。いわ  
うや人倫をや。されば古への賢者豫攘といゐし者は劍をのみて智伯が恩にあて、こ  
う（弘）演と申せし臣下は腹をさひて、衛の懿公が肝を入れたり。いかにいわうや、仏  
教をならはん者の、父母・師匠・国恩をわするべしや。此の大恩をほうぜんには必ず仏法  
をならひきはめ、智者とならで叶うべきか。譬へば衆盲をみちびかんには、生盲の身にて  
は橋河をわたしがたし。方風を弁えざらん大舟は、諸商を導きて宝山にいたるべしや。  
仏法を習い極めんとをわば、いとまあらずば叶うべからず。いとまあらんとをわば、  
父母・師匠・国主等に随いては叶うべからず。是非につけて、出離の道をわきまへざら  
んほどは、父母・師匠等の心に随うべからず。この義は諸人をもわく、頭にもはづれ冥  
にも叶うまじとをもう。しかれども外典の孝経にも、父母・主君に随わずして忠臣・孝

人なるやうもみえたり。内典の仏經に云く、「恩を棄て無為に入るは真実報恩の者なり」等云云。比干ひかんが王に随わずして賢人けんじんのな(名)をとり、悉達太子しつたたいしの淨飯大王じようぼんだいおうに背きてそむ三界第一さんがいの孝となりしこれなり。

かくのごとく存じて、父母・師匠等に随わずして佛法をうかがひし程に、一代聖いちだいししようぎよう 教をさとるべき明鏡めいきよう十あり。所謂いわゆる俱舎くしや・成実じようじつ・律宗りつしゆう・法相ほつそう・三論さんろん・真言しんごん・華嚴けごん・淨土じようど・禪宗ぜんしゆう・天台てんだい法華宗ほつけしゆうなり。此の十宗を明師として一切經の心をしるべし。世間の学者等おもえり、此の十の鏡はみな正直に仏道の道を照せりと。小乗の三宗はしばらくこれををく、民たみの消息しようそくの是非ぜひにつけて他国へわたるに用なきがごとし。大乘の七鏡こそ、生死しやうじの大海をわたりて、淨土の岸につく大船なれば、此これを習いほどひて、我が身みも助け、人をもみちびかんとおもひて、習ひみるほどに、大乘の七宗いづれもいづれも自讚じさんあり。我が宗こそ一代の心はえたれえたれ等云云。

所謂いわゆる華嚴宗とじゆんの杜順ちじゆん・智儼ちごん・法蔵ほうぞう・澄觀ちようかん等、法相宗げんじようの玄奘じおん・慈恩ちしゆう・智周ちしゆう・智昭ちしやう等、

三論宗の興皇・嘉祥等、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等、禪宗の達磨・慧可・慧能等、浄土宗の道綽・善導・懷感・源空等。此等の宗々みな本經本論によりて我も我も一切經をさとれり、仏意をきはめたりと云云。

彼の人々云く、一切經の中には華嚴經第一なり。法華經・大日經等は臣下のごとし。真言宗云く、一切經の中には大日經第一なり。余經は衆星のごとし。禪宗が云く、一切經の中には楞伽經第一なり。乃至余宗かくのごとし。而も上に挙ぐる諸師は、世間の人々各々おもえり。諸天の帝釈をうやまひ、衆星の日月に隨うのごとし。

我等凡夫はいづれの師々なりとも信ずるならば不足あるべからず。仰ぎてこそ信ずべけれども、日蓮が愚案晴がたし。世間をみるに、各々我も我もといへども国主は但一人なり。二人となれば国土おだやかならず。家に二の主あれば其の家必ずやぶる。一切經も又かくのごとく有るらん。何の經にてもをはせ、一經こそ一切經の大王にてはをはずらめ。而るに十宗七宗まで各々諍論して隨はず。国に七人十人の大王ありて、万民をだやか

ならじ。いかんがせんと疑うところに、一ひとつの願がんを立つ。我れ八宗十宗に随はじ。天台大師の専ら經文を師として一代の勝しょうれつ劣りやくをかながへしがごとく、一切經を開きみるに、ねはんぎよう涅槃經と申す經に云く、「法に依よつて人に依よらざれ」等云云。依法えほうと申すは一切經、不依人ふえにんと申すは仏を除き奉りて外ほかの普賢菩薩ふげんぼさつ・文殊師利菩薩もんじゆしりぼさつ乃至上かみにあぐるところの諸の人師なり。此の經に又云く、「了義經りようぎきように依つて不了義經に依らざれ」等云云。此の經に指すところ了義經と申すは法華經、不了義經と申すは華嚴經・大日經・涅槃經等の已今当いこんとうの一切經なり。

されば仏の遺言ゆいごんを信しんずらならば、専ら法華經を明めい鏡きやうとして一切經の心をばしるべきか。随つて法華經の文を開き奉れば、「此の法華經は諸經の中に於て最も其その上かみに在あり」等云云。此の經文のごとくば、須弥山しゆみせんの頂いただきに帝たいしやく釈おるの居るがごとく、輪王りんのおうの頂たけに如意宝珠にょいほうじゆのあるがごとく、衆木しゆぼくの頂たけに月のやどるがごとく、諸仏の頂上に肉髻にづくいの住せるがごとく、此の法華經は華嚴經・大日經・涅槃經等の一切經の頂上の如意宝珠にょいほうじゆなり。

されば専ら論師人師をすてて経文に依るならば、大日経・華嚴経等に法華経の勝れ給える  
 ことは、日輪の青天に出現せる時、眼あきらかなる者の天地を見るがごとく、高下宛然  
 なり。又大日経・華嚴経等の一切経をみるに、此の経文に相似の経文一字一点もなし。或  
 は小乗経に対して勝劣をとかれ、或は俗諦に対して真諦をとき、或は諸の空仮に対して  
 中道をほめたり。譬へば小国の王が我が国の臣下に対して大王というがごとし。法華  
 経は諸王に対して大王等と云云。  
 但涅槃経計こそ法華経に相似の経文は候へ。されば天台已前の南北の諸師は迷惑して、  
 法華経は涅槃経に劣ると云云。されども専ら経文を開き見るには、無量義経のごとく華嚴  
 ・阿含・方等・般若等の四十余年の経々をあげて、涅槃経に対して我が身勝るととひて、  
 又法華経に対する時は、「是の経の出世は乃至法華の中の八千の声聞に記莂を授くる  
 ことを得て大菓実を成ずるが如く秋収冬蔵して更に所作無きが如し」等と云云。我  
 れと涅槃経は法華経には劣るととける経文なり。かう経文は分明なれども、南北の大智

の諸人の迷うて有りし経文なれば、末代の学者能く能く眼をとどむべし。此の経文は但  
 法華経・涅槃経の勝劣のみならず、十方世界の一切経の勝劣をもしりぬべし。而るを經  
 文にこそ迷うとも、天台・妙樂・伝教大師の御料簡の後は、眼あらん人々はしり  
 ぬべき事ぞかし。然れども天台宗の人たる慈覚・智証すら猶此の経文にくらし。いわう  
 や余宗の人々をや。

或る人疑つて云く、漢土日本にわたりたる経々にこそ法華経に勝たる経はをはずとも、  
 月氏・竜宮・四王・日・月・切利天・都率天などには恒河沙の経々ましますなれば、  
 其の中に法華経に勝れさせ給う御経やましますらん。

答て云く、一をもつて万を察せよ。庭戸を出でずして天下をしるとはこれなり。癡人が  
 疑つて云く、我等は南天を見て東西北の三空を見ず。彼の三方の空に此の日輪より別の日  
 やましますらん。山を隔て煙の立つを見て、火を見ざれば煙は一  
 なかるらん。かくのごとくいはん者は一闡提の人としるべし。生盲にことならず。

法華經ほつしほんの法師品ほつしほんに釈迦如来きんく金口じようごんの誠じようごん言ごんをもて五十余年さだの一切經さだの勝劣さだを定めて云く、

「我わがしよせつ所説わがしよせつの經典きんげんは無量千万億これなんしんなんげにして已すでに説いき今説いまき当まさに説いかん。而しかも其その中に於おて此この法華經ほつしほんは最も為これなんしんなんげ難信難解なんしんなんげなり」等云云。此この經文きんぶんは但ただ釈迦如来いちぶつ一仏いちぶつの説いなりとも、等覺とうかく

已下いげは仰うやぎて信うずべき上うえ、多宝たほう東方とうほうより来きたりて真実しんじつなりと証しやうみやう明あし、十方じふぱうの諸しよ仏ぶつ集じふり

て釈迦しやくか仏ぶつと同じく広こうちやうぜつ長ちやう舌じやうを梵ぼん天てんに付つけ給たまへて後のち各々かくかく国々こくこくへ還かえらせ給たまいぬ。已い今こん当とうの三字さんじ

は五十年ごじゅうねん並びに十方三世じふぱうさんせいの諸しよ仏ぶつの御おん經きやう、一字いちじ一点いってんものこさず引ひき載のせて法華經ほつしほんに對たいして

説せかせ給たまいて候こうを、十方じふぱうの諸しよ仏ぶつ此座このざにして御判形ごはんぎやうを加くえさせ給たまい、各々かくかく又また自国じこくに還かえらせ

給たまいて、我わが弟子等しよし等とうに向むかわせ給たまいて法華經ほつしほんに勝かれたる御經おんきやうありと説せかせ給たまはば、其その所化しよけの

弟子等信用しよしとうしんぎやうすべしや。

又また我わがは見みざれば月氏がつし・竜りゆう宮きゆう・四天してん・日月等にちがつの宮きゆう・殿てんの中に法華經ほつしほんに勝かれさせ給たまいたる

經きやうやおはしますらんと疑ぎいをなすは、されば梵ぼん・積しやく・日月にちがつ・四天してん・竜王りゆうわうは法華經ほつしほんの御座おんざに

はなかりけるか。若もし日月等にちがつの諸しよ天てん、法華經ほつしほんに勝かれたる御經おんきやうまします、汝なんじはしらず、と

仰せあるならば大誑惑の日月なるべし。

日蓮せめて云く、日月は虚空に住し給へども、我等が大地に処するがごとくして墮落し給はざる事は、上品の不妄語戒の力ぞかし。法華経に勝れたる御経ありと仰せある大妄語あるならば、恐らくはいまだ壞劫にいたらざるに大地の上はどうとおち候はんか、無間大城の最下の堅鉄にあらざばとどまりがたからんか。大妄語の人は須臾も空に処して四天下を廻り給うべからず、とせめたてまつるべし。

而るを華嚴宗の澄觀等、真言宗の善無畏・金剛智・不空・弘法・慈覚・智証等の大智の三藏大師等の、華嚴経・大日経等は法華経に勝れたりと立て給わば、我等が分齊には及ばぬ事なれども、大道理のをすところは豈に諸仏の大怨敵にあらずや。提婆・瞿伽梨もものならず、大天・大慢外にもとむべからず。かの人々を信ずる輩はをそろしをそろし。

問うて云く、華嚴の澄觀・三論の嘉祥・法相の慈恩・真言の善無畏乃至弘法・慈覚・



智証等ちしようを仏の敵のと宣給うか。

答えて云く、此これ大なる難也なり。仏法に入りて第一の大事也。愚眼ぐげんをもて經文を見るには、

法華經に勝れたる經ありといはん人は、設たといかなる人なりとも謗法ほうぼうは免れじと見え  
て候。而しかるを經文のごとく申すならば、いかでか此の諸人ぶつてき仏敵たらざるべき。若し又を

それをなして指申さしさずは一切經の勝劣むなし空かるべし。又此の人々を恐れて、末すえの人々を

仏敵といはんとすれば、彼の宗々の末の人々の云く、法華經に大日經をまさりたりと申す  
は我われ私わたくしの計はからいにはあらず、祖師の御義也おんぎ。戒行の持破じは、智慧の勝劣、身の上下はあり

とも、所學しよがくの法門はたがふ事なし、と申せば彼人々にとがなし。

又日蓮此これを知りながら人々を恐れて申さずば、「寧によう喪身そうしん命不匿みよふのくき教者ようしや」の仏陀の諫曉かんぎよう  
を用いぬ者となりぬ。いかんがせん。言いはんとすれば世間をそろし。止やめんとすれば仏の諫曉

のがれがたし。進退しんたい此こに谷きわまれり。むべなるかなや、法華經の文に云く、「而しかも此の經は

如来の現在にすら猶な怨嫉多し、況いんや滅度の後をや」。又云く、「一切世間せけん怨多あだくして信

じ難し」等云云。

釈迦仏を摩耶夫人孕せ給いたりければ、第六天の魔王、摩耶夫人の御腹をとをし見て、

我等が大怨敵法華経と申す利剣をはらみたり。事の成ぜぬ先にいかにしてか失うべき。

第六天の魔王、大医と變じて淨飯王宮に入り、御産安穩の良薬を持候大医ありとの

しりて、毒を後にまいらせつ。初生の時は石をふらし、乳に毒をまじへ、城を出でさ

せ給いしには黒き毒蛇と變じて道にふさがり、乃至提婆・瞿伽梨・波瑠璃王・阿闍世王

等の悪人の身に入りて、或は大石をなげて仏の御身より血をいだし、或は釈子をころ

し、或は御弟子等を殺す。此等の大難は皆遠くは法華経を仏世尊に説かせまいらせじと

巧謀し「如来現在猶多怨嫉」の大難ぞかし。此等は遠き難なり。近き難には舍利弗・目連

・諸大菩薩等も四十余年が間は法華経の大怨敵の内ぞかし。

「況滅度後」と申して未来の世には又此の大難よりもすぐれてをそろしき大難あるべし

と、とかれて候。仏だにも忍びがたかりける大難をば凡夫はいかでか忍ぶべき。いわうや

在世より大なる大難にてあるべかなり。いかなる大難か提婆だいばが長三丈広一丈六尺ながきひろさの大石あじやせおう、阿闍世王あじやせおうの醉象すいぞうにはすぐべきとはおもへども、彼かれにもすぐるべく候なれば、小失しょうしつなくとも大難に度々たびたび値う人をこそ滅後めつごの法華經の行者とはしり候そうらわめ。

付法蔵の人々は四依しえの菩薩ぼさつ、仏の御おんつかい使だいなり。提婆菩薩だいばぼさつは外道げどうに殺され、師子尊者ししそんじやは檀弥羅王だんみらおうに頭こうべを刎はねられ、仏陀密多ぶつだみつた・竜りゆうじゆぼさつ樹菩薩じゆぼさつ等は赤幡あかはたを七年十二年さしとをす。馬鳴菩薩めみようぼさつは金錢三億がかわりとなり、如意論師にょいろんじはおもひじにに死す。此等これらは正法しやうぼう一年の内うちなり。

像法ぞうぼうに入いりて五百年、仏滅後一千五百年と申せし時、漢土かんどに一人の智人ちじんあり。始はじめは智顛ちぎ、後のちには智者大師ちしやだいしとがうす。法華經の義をありのまゝに弘通くわうつうせんと思ひ給しに、天台已前の百千万の智者しなじなに一代はんを判はんぜしかども詮せんじて十流じゅうりゅうとなりぬ。所謂いわゆる南三北七なんさんほくしちなり。十流ありしかども、一流をもて最さいとせり。所謂いわゆる南三の中の第三の光宅寺こうたくじの法雲法師ほううんほつしこれなり。

此の人は一代の仏教を五いつつにわかつ。其その五の中に三経を選えらびいだ出す。所謂いわゆる華嚴經・涅槃經  
 ・法華經なり。一切經の中には華嚴經第一、大王のごとし。涅槃經第二、撰せつしようかんばく政闕白の  
 ごとし。第三法華經は公卿くぎようのごとし。此れより已下いかは万民ばんみんのごとし。此の人は本もとより  
 智慧ちゑかしこき上うへ、慧觀えかん・慧嚴えげん・僧そうにゆう柔えじ・慧次えじなど申せし大智者より習ひ伝え給たまわ  
 るのみならず、南北の諸師の義をせめやぶり、山林まじわに交りて法華經・涅槃經・華嚴經の功こうを  
 積つもりし上うへ、梁りようの武帝ぶていめ召い出して内裏だいりの内に寺うぢを立て、光宅寺こうたくじとなづけて此の法師をあ  
 がめ給たまう。法華經を講かうぜしかば、天てんより花はなふること在あ世よのごとし。  
 天監五年てんかんに大旱かんばつ魃かありしかば、此の法雲法師を請まねじ奉たてまつりて法華經を講まねぜさせまいらせし  
 に、藥草やくそう喻品ゆひんの「其雨ごう普等ふとう四方しほう俱下くげ」と申す二句を講まねぜさせ給たまいし時、天てんより甘雨かんう下かりた  
 りしかば、天子てんし御感ぎよかんのあまりに現げんに僧そうじよう正せいになしまいらせて、諸天しよてんの帝たい釈しやくにつかえ、  
 万民ばんみんの国王こわうををそるゝがごとく、我われとつかへ給たまいし上うへ、或人ゆめみち夢ゆめく、此人このひとは過去この  
 灯明とうみやう仏ぶつの時ときより法華經をかうぜる人なり。法華經の疏しよ四卷あり。此この疏しよに云く、

「此經このきよういま未だ碩然せきねんならず」。亦云く、「異いの方便ほうべん」等云云。まさし正ただく法華經はいまだ仏理ぶつりを  
 きわめざる經と書かれて候。此の人の御義おんぎ、仏意ぶつゐに相あひ叶かなひ給たまいければこそ、天より花  
 も下ふり雨もふり候けらめ。

かゝるいみじき事にて候しかば、漢土かんどの人人ひとさては法華經は華嚴經・涅槃經には劣おとろにて  
 こそあるなれと思ひし上、新羅しらぎ・百濟くだら・高麗こま・日本まで此疏このしよひろまりて、大体一同の義  
 にて候しに、法雲法師御死去ごしきよありていくばくならざるに、梁りようの末すえ、陳ちんの始はじめに、智顛ちぎほつし法師  
 と申す小僧しよそうしゆつたい出い来きせり。南岳なんがくだいし大師だいしと申せし人の御弟子みでしなりしかども、師の義も不審ふしんに  
 ありけるかのゆへに、一切經いつさいきようぞう藏ざうに入いつて度々たびたび御らんありしに、華嚴經・涅槃經・法華  
 經の三經さんけいに詮せんじいだし、此の三經の中に殊ことに華嚴經を講こうじ給たまいき。  
 別べつして礼文らいもんをつく造つくりて日々に功こうをなし給たまいしかば、世間の人おもはく、此人このひとも華嚴經を第  
 一とおぼすかと見えしほどに、法雲法師が一切經の中に華嚴第一・涅槃第二・法華第三と  
 立てたるが、あまりに不審ふしんなりける故に、ことに華嚴經を御ごらんありけるなり。かくて一

切経の中に法華第一・涅槃第二・華嚴第三と見定めさせ給いてなげき給うやうは、如来の  
 聖しやうぎやう 教は漢土かんどにわたれども、人を利益りやくすることなし。かへりて一切衆生を惡道あくどうに導びく  
 こと、人師にんしの悞あやまりによれり。例せば国の長おさとある人、東を西といひ、天を地といひ、  
 ぬれば、万民ばんみんはかくのごとくに心うべし。後にいやしき者出しゆつた来して、汝等が西は東、  
 汝等が天は地なり、といわばもちうるることなき上、我が長わ おさの心に叶かなわんがために、今の  
 人を罵打のりうちなんどすべし。いかんがせんとはおぼせしかども、さてもだす(黙止)べきに  
 あらねば、光宅寺の法雲法師は謗法ほうぼうにて地獄じごくに墮おちぬとののしられ給う。  
 其時そのとき南北の諸師蜂はちのごとく蜂起ほうきし、からす(鳥)のごとく鳥合うごうせり。智顛法師をば頭こうべ  
 を破わるべきか、国を逐をうべきか、なんど申せし程に、陳主ちんしゆ此れをきこしめして、南北の數人すうにん  
 に召めし合あせて、我われと列座れつざしてきかせ給いき。法雲法師が弟子等えよう慧榮・法歳はつさい・慧曠えこう・慧えごう  
 なんど申せし僧そうじやう 正僧都せうじやう已上の人々百余人なり。各々惡口あつくを先さきとし、眉をあげ、眼をい  
 からかし、手をあげ、拍子ひやうしをたたく。而しかれども智顛法師は末座まつざに坐して色をへん変ぜず、言ことば

を悞あやまらず、威儀いぎしづかにして、諸僧しよそうの言ことばを一々に牒じようをとり、言ことごとに責返せめかへす。押返おしかへして難たがじて云く、抑そもそも法雲法師おんぎの御義ごぎに第一華嚴第二涅槃第三法華と立たてさせ給たまいける証文しやうもんは何いずれの経きやうぞ。慥たしかに明あきらかなる証文しやうもんを出ださせ給たまえとせめしかば、各々頭こうべをうつぶせ、色うしなを失うしないて一言いちごんの返事へんじなし。

重かさねてせめて云く、無量義經むりようぎきやうに正まさしく「次説方等十二部經摩訶般若華嚴海空」等云いふ云。仏ほとけ、我われと華嚴經わげんの名なをよびあげて、無量義經むりようぎきやうに対して未顕みけん真実しんじつと打ち消し給たまう。

法華經ほふわきやうに劣せうりて候あひま無量義經むりようぎきやうに華嚴經わげんはせめられて候あひまぬ。いかに心こころえさせ給たまいて、華嚴經わげんをば一代第一いちだいだいいちとは候あひまけるぞ。各々御師おんしの御方おんかたうど人ひとせんとをぼさば、此こゝの経文きやうもんをやぶりて、此こゝに勝すぐれたる経文きやうもんを取り出して、御師おんしの御義ごぎを助け給たまえとせめたり。

又涅槃經えんぱんきやうを法華經ほふわきやうに勝すぐると候あひまけるはいかなる経文きやうもんぞ。涅槃經えんぱんきやうの第十四じゅうしには華嚴・阿含・方等・般若ぼんげをあげて、涅槃經えんぱんきやうに対して勝劣しやうりやくは説とかれて候あひまへども、またく法華經ほふわきやうと涅槃經えんぱんきやうとの勝劣しやうりやくはみへず。次上つぎかみの第九くわうじゅうの卷まきに、法華經ほふわきやうと涅槃經えんぱんきやうとの勝劣しやうりやく分ぶん明みやうなり。所謂いわゆる経文きやうもんに

云く、「是この經しゆつせの出世しゆつせは乃至法華の中の八千の聲聞きべつ記き莚べつを受うくることを得えて大菓実だいかじつを成じやうずるが如ごとし。秋しゆうしゆうとうぞう 收冬しゆうしゆうとうぞう 蔵ざうして更さらに所作しよさ無なきが如ごとし」等云云。經文あきらか 明あきらかに諸經しゆんかをば春夏しゆうんかと説せかせ給たまひ、涅槃經ねはんと法華經ほふわとをば菓実かじつの位くらひとは説せかれて候まちへども、法華經ほふわをば秋しゆうしゆうとうぞう 收冬しゆうしゆうとうぞう 蔵ざう大菓実だいかじつの位くらひ、涅槃經ねはんをば秋しゆうしゆうとうぞうの末冬すえの始くんじゆう摺じゆう拾しゆうの位くらひと定め給たまひぬ。此この經文まさし正まさしく法華經ほふわには我身わがみ劣なると承しょうぶく 伏ふくし給たまひぬ。法華經ほふわの文ぶんには已説いせつ・今説こんせつ・当説とうせつと申まをして、此この法華經ほふわは前ぜんと並ならびとの經きやう々に勝かれたるのみならず、後に説せかん經きやう經きやうにも勝かるべしとほとけ定さだめ給たまう。すでに教主きゆうしゆう釈尊しやくそんかく定め給たまひぬれば疑ぎうべきにあらねども、我が滅後めつごはいかんがと疑ぎいおぼして、東方宝ほうじゆうせかい 淨世界たほうぶつの多宝たほうぶつ仏ぶつを証しょうにん 人にんに立たて給たまひしかば、多宝たほうぶつ仏ぶつ大地だいちよりをどり出いでて、妙法華經みやうほけきやう皆みな是ぜ真実しんじつと証しょうし、十方ふんじん分身ふんじんの諸しよ仏ぶつ重かさねてあつまらせ給たまひ、こうちようぜつ 広ひろ長ちやう舌ぜつを大梵だいぼんてん 天てんに付つけ、又教きやう 主釈しゆしやく 尊そんも付つけ給たまう。然しかして後のち、多宝たほうぶつ仏ぶつは宝淨世界たほうふんじんえかへり、十方ふんじんの諸しよ仏ぶつ各々おの本ほん土どにかへらせ給たまひて後のち、多宝たほうぶつ分身ふんじんの仏ぶつもおはせざらん、教主きゆうしゆう釋尊しやくそん涅槃經ねはんをといて、法華經ほふわに勝すくと仰おほせあらば、御弟子みでし等は信まをぜさせ給たまうべしや、と



せめしかば、日月の大光明の修羅の眼を照らすのごとく、漢王の劍の諸侯の頸にかかりしがごとく、両眼をとち一頭を低れたり。天台大師の御気色は師子王の狐兔の前に吼えたるのごとし、鷹鷲の鳩雉をせめたるにいたり。

かくのごとくありしかば、さては法華経は華嚴経・涅槃経にもすぐれてありけりと、震旦一国に流布するのみならず、かへりて五天竺までも聞へ、月氏大小の諸論も智者大師の御義には勝れず。教主釈尊両度出現しますか。仏教二度あらはれぬとほめられ給いしなり。

其の後天台大師も御入滅なりぬ。陳隋の世も代りて唐の世となりぬ。章安大師も御入滅なりぬ。天台の仏法やうやく習い失せし程に、唐の太宗の御宇に玄奘三蔵といひし人、貞観三年に始めて月氏に入り、同十九年にかへりしが、月氏の仏法尋ね尽して法相宗と申す宗をわたす。

此の宗は天台宗と水火なり。而るに天台の御覧なかりし深密経・瑜伽論・唯識論等を

わたして法華経は一切経には勝れたれども深密には劣るといふ。而るを天台は御覧なかりしかば、天台の末学等は智慧の薄きかのゆへに、さもやとをもう。又太宗は賢王なり。玄 奘の御帰依あさからず。いふべき事ありしかども、いつもの事なれば時の威を、それで申す人なし。法華経を打ちかへして、三 乘真実、一 乘方便、五性各別と申せし事は心うかりし事なり。天竺よりはわたれども、月氏の外道が漢土にわたれるか。法華経は方便、深密経は真実といふしかば、釈迦多宝十方の諸仏の誠言もかへりて虚くなり、玄 奘・慈恩こそ時の生身の仏にてはありしか。

その後則天皇の御宇に、前に天台大師にせめられし華嚴経に、又重て新訳の華嚴経わたりしかば、さきのいきどをりはたさんがために、新訳の華嚴をもつて、天台にせめられし旧訳の華嚴経を扶けて、華嚴宗と申す宗を法蔵法師と申す人立てぬ。此宗は華嚴経をば根本法輪、法華経をば枝末法輪と申すなり。南北は一華嚴・二涅槃・三法華、天台大師は一法華・二涅槃・三華嚴。今の華嚴宗は一華嚴・二法華・三涅槃等云云。

其その後ご玄げん宗そう皇こう帝ていの御ぎ宇うに、天てん竺じくより善ぜん無むい畏さん三ぞう藏ぞうは大だい日にち経きよう・蘇そ悉しつ地ち経きようをわたす。  
 金剛智三藏こんごうちさんぞうは金剛頂こんごうちようきよう経きようをわたす。又金剛智三藏こんごうちさんぞうに弟子ふくうさんぞうあり。此この三  
 人がは月がつ氏しの人しゆ、種しゆ姓しやうも高こう貴きなる上うへ、人がらも漢かん土どの僧そうににず。法門はふもんもなにとはしらず、  
 後漢ごかんより今いまにいたるまでなかりし印いんと真言しんごんという事ことをあひそい（相副さうぶ）てゆゝしかりし  
 かば、天子てんしかうべ（頭あたま）をかたぶけ、万民ばんみん掌てのひらをあわす。  
 此この人ひと々々の義ぎにいわく、華嚴けげん・深密じんみつ・般若はんにか・涅槃ねはん・法華ほふき経きよう等らの勝劣けんりやうは頭けんぎ教きやうの内うち、釈迦しやか  
 如來にの説いの分ぶん也なり。今いまの大だい日にち経きよう等らは大だい日にち法はふ王わうの勅ちやく言げんなり。彼かの経きん々々は民たみの万言ばんげん、此この経きん  
 は天子てんしの一いち言げん也なり。華嚴けげん経きん・涅槃ねはん経きん等らは大だい日にち経きんには梯はしを立てても及たばず。但ただ法華ほふか経きん計けいり  
 こそ大日だい経きんには相さう似じの経きんなれ。されども彼かの経きんは釈迦しやか如來にちの説い、民たみの正しやう言げん、此この経きんは天子てんし  
 の正しやう言げんなり。言ことは似じれども人うんがら雲泥うんでいなり。譬たとへば濁じよくすい水すいの月げつと清せい水すいの月げつのごとし。  
 月げつの影えいは同どうじじけれども水すいに清濁せいだくありなんど申ましければ、此この由よし尋あねあ頭あす人ひともなし。諸  
 宗しゆ皆みな落おちふ伏ふして真言しんごん宗しゆにかたぶきぬ。善ぜん無むい畏さん・金剛智こんごうち、死し去その後ご、不ふ空くう三さん藏ぞう又また月がつ氏しにか

へりて菩提心論と申す論をわたし、いよいよ真言宗盛りなりけり。

但し妙樂大師といふ人あり。天台大師よりは二百余年の後なれども、智慧かしこき人

にて、天台の所積を見明てをせしかば、天台の積の心は後にわたれる深密經

法相宗、又始めて漢土に立てたる華嚴宗、大日經真言宗にも法華經は勝れさせ給

いたりけるを、或は智慧の及ばざるか、或は人を畏るか、或は時の王威をおづるかの故

にいはざりけるか。かうであるならば天台の正義すでに失なん。又陳・隋已前の南北が

邪義にも勝れたりとおぼして、三十卷の末文を造り給う。所謂弘決・釈籤・疏記これ

なり。此三十卷の文は本書の重なるをけづり、よわき（弱）をたすくるのみならず、

天台大師の御時なかりしかば、御責にものがれてあるやうなる法相宗と華嚴宗と

真言宗とを、一時にとりひしがれたる書なり。

又日本国には人王第三十代欽明天皇の御宇十三年壬申十月十三日に、百済国より一

切経釈迦仏の像をわたす。又用明天皇の御宇に聖徳太子仏法をよみはじめ、和氣の妹子

と申す臣下を漢土につかはして、先生せんしやうの所持しよじの一卷の法華經をとりよせ給いて持經じきやうと定め、其その後人王第三十七代に孝徳天王かうとくてんのうの御宇ぎやうに、三論宗・華嚴宗・法相宗・俱舍宗じやうじつしゆう

・成実宗じやうじつしゆうわたる。人王第四十五代に聖武天皇しやうむてんのうの御宇ぎやうに律宗りつしゆうわたる。已上六宗いじやうなり。

孝徳かうとくより人王第五十代の桓武天王かんむてんのうにいたるまでは十四代一百二十余年が間は天台・真言の二宗ことうとくなし。

桓武かんむの御宇ぎやうに最澄さいちやうと申す小僧しやうそうあり。山階寺やましなでらの行表僧ぎやうひやうそうじやう正みでしの御弟子みでしなり。法相宗ほつそうしゆう

を始めとして六宗を習いきわめぬ。而しかれども仏法ぶつぽういまだ極きわめたりともをぼえざりしに、  
 華嚴宗けげんしゆうの法蔵法師ほうざうほつしが造りたる起信論きしんろんの疏しよを見給みうに、天台大師てんたいだいしの釈しやくを引きのせたり。

此疏このしよこそ子細しさいありげなれ。此国このくにに渡りたるか、又またいまだわたらざるか、と不審ふしんありしほどに、有人あるひとにとひしかば其人そのひとの云いく、大唐だいとうの揚州やうしゆうりゆうこうじ竜興寺りゆうきやうじの僧鑒がんじんわじやう真和まわ尚まうは天台てんたいの末学まつがく、  
 道暹律師どうせんりつしの弟子てんぼう、天竺てんぽうの末すえに日本国にっぽんこくにわたり給たまいて、小乘せうじやうの戒けいを弘通くわうつうせさせ給たまいしかども、天台てんたいの御釈おんしやく持もち来きたりながらひろめ給たまはず。人王第四十五代にんおうだいごじゆうご聖武しやうむ天王てんのうの御宇ぎやうなりと

かたる。其書を見んと申されしかば、取り出して見せまいらせしかば、一返御らんありて、生死の酔をさましつ。此の書をもつて六宗の心を尋ねあきらめしかば、一々に邪見なる事あらはれぬ。忽に願を發て云く、日本国の人皆謗法の者の檀越たるが天下一定乱れなんずとをぼして、六宗を難ぜられしかば、七大寺六宗の碩学蜂起して、京中烏合し、天下みなさわぐ。七大寺六宗の諸人等悪心強盛なり。

而るを去る延暦二十一年正月十九日に、天王高雄寺に行幸あて、七寺の碩徳十四人、善議・勝猷・奉基・寵忍・賢玉・安福・勤操・修円・慈誥・玄耀・歳光・道証・光証・觀敏等の十有余人を召し合わす。華嚴・三論・法相等の人々各々我宗の元祖が義にたがはず。最澄上人は六宗の人々の所立一々に牒を取りて、本經本論並に諸經諸論に指し合せてせめしかば、一言も答えず、口をして鼻のごとくになりぬ。天皇をどろき給いて、委細に御たづねありて、重ねて勅宣を下して、十四人をせめ給いしかば、承伏の謝表を奉りたり。

其書そのしよに云く「七箇しちかの大寺だいじ六宗ろくしゆうの学がく匠たくし乃至はじめ初しじくて至極さいとくを悟さとる」等云云。又云く「聖しやうとく徳とくの弘くわ化くわより以降このかた今いまに二百余年にひゃくにじゅうふたしせんねんの間ま講かうずる所ところの經きやう論ろん其その数かず多おほし。彼かれ此こ理りを争まをつて其その疑ぎ未いまだ解とけず。而しかるに此この最さい妙みやうの円えん宗しゆう猶なほ未いまだ闡せん揚やうせず」等云云。又云く「三論さんろん法ぽう相しやう久きう年ねんの諍あらそい渙かんえん焉んとして氷こおりの如ごとく解とけ照しやう然ぜんとして既すでに明あきらかに猶なほ雲霧うんむを披ひらいて三光さんかうを見るがごとし」云云。

最さい澄ちやう和わ尚じやう十四人じしにんが義ぎを判はんじて云く「各おの一おの軸いちじくを講かうずるに法鼓ぽうこを深壑じんがくに振ふるい賓主ひんしゆ三乗さんじやうの路みちに徘徊はいかいし義旗ぎきを高かう峰ほうに飛とば。長ちやう幼三有ゆうさんうの結けつを摧破さいはして猶なほ未いまだ歴りやつ劫こつの轍てつを改かめず白牛びやくぐを門外もんげに混こんず。豈あに善よく初しよ発ほつの位くらいに昇あり阿茶あだを宅内たくないに悟さとらんや」等云云。弘世ひろよ・真綱まつな二人にんの臣下しんか云く「靈りやう山せんの妙法みやうぽうを南岳なんがくに聞きき総持そうじの妙悟みやうごを天台たいに闢ひらく一乘いつじやうの権滯こんたいを慨なげき三諦さんたいの未顕みけんを悲あはしむ」等云云。又十四人じしにんの云く「善議ぜんぎ等ひかれ牽きて休きゆう運うんに逢おうて乃すなわち奇詞きしを聞きみ。深期じんごに非あらざるよりは何なんぞ聖世せいせに託たくせんや」等云云。

此十四人じしにんは華嚴宗けわげんしゆうの法蔵ぽうざう・審祥しんじやう、三論宗さんろんしゆうの嘉祥かじやう・觀勒かんろく、法相宗ぽうしやうしゆうの慈恩じおん・道昭どうしやう、律宗りつしゆう

の道宣どうせん・鑿真等がんじんの、漢土かんど日本の元祖等がんその法門はふもん、瓶かめはかはれども水みづは一也ひとつ。而しかるに十四  
 人か彼の邪義じやぎをすてて、伝教でんきやうの法華經はふわきやうに帰伏きふくしぬる上かみは、誰だれの末代まつだいの人かか華嚴けごん・般若はんにか・  
 深密じんみつきやう經等きやうは法華經はふわきやうに超過ちやうかせりと申まをすべきや。小乘せうじやうの三宗さんしゆは又か彼のか人々じんじんの所学しよがくなり。大  
 乘だいじやうの三宗さんしゆ破やぶれぬる上かみは、沙汰さたのかぎりかぎりにあらあらず。而しかるを今いまに子細しさいを知らしらざる者もの、六宗りくしゆは  
 いまだ破やぶられずとをもへり。譬たとへば盲目めしが天あまの日月にちがつを見みず、聾人つんぼが雷いかずちの音ねをきかざる  
 がゆへに、天あまには日月にちがつなし、空そらに声こゑなしとをもうがごとし。

真言宗しんごんしゆと申まをすは、日本人にほんじん王わう第四十四代だいじゅうしじゅうだいと申まをせし元げん正天皇しやうてんのうの御宇ぎやうに、善無畏ぜんむい三藏さんざう、  
 大日だい經にちぎやうをわたして弘通くわうつうせずして漢土かんどへかへる。又また玄昉げんぼう等ら、大日だい經にちぎやうの義ぎ積じやく十四卷じゅうしきやくをわた  
 す。又また東大寺とうだいじの得とく清大徳しやうだいてくわたす。

此等これらを伝教でんきやう大師だいし御ごらんありてありしかども、大日だい經にちぎやう・法華經はふわきやうの勝劣しやうりやくいかんがとおぼしける  
 ほどに、かたがた不審ふしんありし故ゆゑに、去延いぬえん曆りやく二十三年にじゅうさんねん七月しちがつ御入唐ごにいつたう。西明寺さいみやうじの道邃どうずい和尚わじやう  
 ・仏滝寺ぶつろうじの行ぎやう満等まんたうに値あい奉ほうりて、止観しかん円頓えんどんの大戒だいかいを伝受でんじゆし、靈感寺れいかんじの順じゆん和尚ぎやうわじやうに値あ



い奉りて、真言を相伝し、同延暦二十四年六月に帰朝し、桓武天王に御対面。宣旨を下  
 て、六宗の学匠に止観・真言を習はしめ、同七大寺にをかれぬ。真言・止観の二宗の  
 勝劣は漢土に多く子細あれども、又大日経の義釈には理同事勝とかきたれども、伝教大  
 師は善無畏三蔵のあやまりなり、大日経は法華経には劣りたりと知しめして、八宗とは  
 せさせ給はず。真言宗の名をけづりて、法華宗の内に入れ七宗となし、大日経をば法華  
 天台宗の傍依経となして、華嚴・大品般若・涅槃等の例とせり。而れども大事の円頓  
 の大乗別受戒の大戒壇を我が国に立う立じの諍論がわづらはしきに依りてや、真  
 言・天台二宗の勝劣は弟子にも分明にをしえ給わざりけるか。

但依憑集と申す文に、正しく真言宗は法華天台宗の正義を偷みとりて、大日経に入れ  
 て理同とせり。されば彼の宗は天台宗に落ちたる宗なり。いわうや不空三蔵は善無畏  
 ・金剛智入滅の後、月氏に入りてありしに、竜智菩薩に値い奉りし時、月氏には仏意を  
 あきらめたる論釈なし。漢土に天台という人の釈こそ、邪正をえらび、偏円をあき

らめたる文にては候なれ。あなかしこ、あなかしこ。月氏へ渡し給えと、ねんごろにあつら（詔）へし事を、不空の弟子含光といひし者が妙楽大師にかたれるを、記の十の末に引き載せられて候を、この依憑集に取り載せて候。法華經に大日經は劣るとしろしめす事、伝教大師の御心頭然也。

されば釈迦如来・天台大師・妙楽大師・伝教大師の御心は一同に大日經等の一切經の中には法華經はすぐれたりという事は分明なり。又真言宗の元祖という竜樹菩薩の御心もかくのごとし。大智度論を能く尋ぬるならば此事分明なるべきを、不空があやまれる菩提心論に皆人ばかされて此事に迷惑せるか。

又石淵の勤操僧 正の御弟子に空海と云う人あり。後には弘法大師とがうす。去ぬる延暦二十三年五月十二日に御入唐、漢土にわたりては金剛智・善無畏の両三蔵の第三の御弟子慧果和尚といひし人に兩界を伝受、大同二年十月二十二日に御帰朝、平城天王の御宇なり。桓武天皇は御ほうぎよ、平城天王に見参し、御用いありて御帰依他

にことなりしかども、平城ほどもなく嗟峨に世をとられさせ給いしかば、弘法ひき入れてありし程に、伝教大師は嗟峨の天王弘仁十三年六月四日御入滅。同じき弘仁十四年より弘法大師、王の御師となり、真言宗を立てて東寺を給い、真言和尚とがうし、此より八宗始る。

一代の勝劣を判じて云く、第一真言大日経・第二華嚴・第三は法華涅槃等云云。法華経は阿含・方等・般若等に対すれば真実の経なれども、華嚴経・大日経に望むれば戲論の法なり。教主釈尊は仏なれども、大日如来に向うれば無明の辺域と申して皇帝と俘囚との如し。天台大師は盗人なり。真言の醍醐を盗んで法華経を醍醐というなんどかゝれしかば、法華経はいみじとをもへども、弘法大師にあひぬれば物のかずにもあらず。天竺の外道はさて置きぬ。漢土の南北が法華経は涅槃経に対すれば邪見の経といふしにもすぐれ、華嚴宗が法華経は華嚴経に対すれば枝末教と申せしにもこへたり。例ば彼の月氏の大慢婆羅門が自在天・那羅延天・婆薮天・教主釈尊の四人を高座の足

につくりて、其の上そにのぼつて邪法じやほうを弘めしがごとし。伝教大師御存生ごぞんしやうならば、一言いちごんは出されいだべかりける事なり。又義真ぎしん・円澄えんちやう・慈覚じかく・智証ちしやう等もいかに御不審ごふしんはなかりけるやらん。天下第一てんかの大凶だいきやうなり。

慈覚大師は去ぬる承和五年に御入唐、漢土にして十年が間、天台・真言の二宗をならう。

法華・大日経の勝劣を習いしに、法全はつぜん・元政げんじやう等の八人の真言師には法華経と大日経は

理同事勝等云云。天台宗の志遠しおん・広修こうしゆう・維蠲ゆいけん等に習いしには大日経は方等部ほうとうぶの撰等しやう

云云。同じき承和十三年九月十日に御帰朝、嘉祥元年六月十四日に宣旨下。法華・大

日経等の勝劣は漢土かんどにしてしりがたかりけるかのゆへに、金剛頂経こんじやうちやうきやうの疏七卷しよ・蘇悉

地経ちきやうの疏七卷、已上十四卷、此疏の心は大日経だいにちきやう・金剛頂経こんじやうちやうきやう・蘇悉地経そしつちきやうの義と法華

経の義は、其所詮そのしよせんの理は一同なれども、事相じさうの印いんと真言しんごんとに真言の三部経さんぶきやうすぐれたりと

云云。此これは偏ひとえに善無畏ぜんむい・金剛智こんじやうち・不空ふくうの造りたる大日経だいにちきやうの疏しよの心のごとし。

然れども我が心に猶不審なほふしんやのこりけん。又心にはとけ(解)てんけれども、人の不審ふしんを

はらさんとやをぼしけん。此この十四卷の疏しよを御本尊ごほんぞんの御前おんまえにさしをきて御祈請ごきしようありき。か  
 くは造りて候へども仏意計ぶつちはかりがたし。大日の三部いっかやすぐれたる、法華經の三部ぶつちはかやまされ  
 る、と御祈念ごきねんありしかば、五日いつかと申す五更ごごうに忽たちまちに無想むそうあり。青天せいてんに大日輪だいにちりんかゝり給  
 へり。矢をもてこれを射いければ、矢飛とんで天そらにのぼり、日輪にちりんの中に立ちぬ。日輪動轉にちりんどうてん  
 て、すでに地に落おちんとす、とをもひてうちさめ(打覚)ぬ。悦よろこんで云く、我吉夢われきちむあり。  
 法華經に真言勝すぐれたりと造りつるふみ(文)は仏意ぶつちに叶かないけり、と悦よろこばせ給たまひて宣旨せんじを申  
 し下くだして、日本国くわんこくに弘通くわうつうあり。而も宣旨せんじの心に云く、「遂ついに知しんぬ。天台の止觀しがんと真言ほんごんの法義ほうぎ  
 とは理冥みように符あえり」等と云云。祈請きしようのごときんば、大日經に法華經は劣れつなるやうなり。  
 宣旨せんじを申くだし下くだすには、法華經と大日經とは同じ等云云。  
 智証大師ちしやうだいしは本朝ほんちやうにしては、義真和尚ぎしんわじやう・円澄大師えんちやうだいし・別当べつとう・慈覺じかく等の弟子でしなり。顕密けんみつ  
 の二道だいたいこのくには大体だいたい此国このくににして学がくし給たまいけり。天台・真言二宗の勝劣ごふしんの御不審ごふしんに漢土かんどへは渡り  
 給たまいけるか。去る仁寿二年いにしゆに御入唐ごにいつとう、漢土かんどにしては真言宗ほんごんは法全はつせん・元政げんじやう等らにならばせ

給い、大体大日経と法華経とは理同事勝、慈覚の義のごとし。天台宗は良 謂和尚にな  
 らひ給ふ。真言・天台の勝劣、大日経は華嚴・法華等には及ばず等云云。七年が間漢土に経  
 て、去る貞 観元年五月十七日御帰朝。大日経の旨帰に云く「法華尚及ばず 況や自余の  
 教をや」等云云。此釈は法華経は大日経には劣る等云云。又授 決集に云く「真言禅門  
 乃至若し華嚴・法華・涅槃等の経に望むれば是れ撰 引門なり」等云云。普賢経の記・論  
 の記に云く、「同じ」等云云。

貞 観八年丙 戌四月二十九日壬 申勅 宣を申し下して云く「聞くならく真言止観兩  
 教の宗同じく醍醐と号し俱に深秘と称す」等云云。又六月三日の勅 宣に云く「先師既  
 に兩 業を開いて以て我が道と為す。代々の座主相 承して兼ね伝えざること莫し。在後  
 の輩 豈旧 迹に乖かんや。聞くならく山 上の僧等 専ら先師の義に違いて偏 執の心  
 を成ず。殆んど余風を扇揚し旧業を興 隆するを顧みざるに似たり。凡そ厥師資の道  
 一を闕くも不可なり。伝弘の勤め寧ろ兼備せざらんや。今より以後宜く兩教に通達す

る人を以て延えんりやくじ 曆寺の座主と為し立てて恒例と為すべし」云云。

されば慈覚・智証の二人は伝でんぎよう 教・義真の御弟子、漢土にわたりては又天台・真言の明師めいし

に値あいて有ありしかども、二宗の勝劣は思い定めざりけるか。或あるいは真言はすぐれ、或は法

華すぐれ、或は理同事勝等云云。宣旨せんじを申し下すには、二宗の勝劣を論ぜん人は違勅いちよくの

者といましめられたり。此等これらは皆自語相違じごそういといぬべし。他宗の人はよも用いじとみえて

候。但ただし二宗齊等さいとうとは先師伝教大師の御義おんぎと宣旨せんじに引き載せられたり。抑そもそも伝教大師い

づれの書しよにかかれて候ぞや。此事このことよくよく尋ぬべし。

慈覚・智証と日蓮とが伝教大師の御事おんことを不審申すは、親に値あうての年あらそひ、日天にってんに

値あい奉りての目くららにて候へども、慈覚・智証の御かたふどをせさせ給はん人々は、

分ぶん明なる証しやうもん 文をかまへさせ給うべし。詮せんずるところは信をとらんがためなり。玄奘げんじやう

三蔵さんざうは月氏の婆沙論を見たりし人ぞかし。天竺てんじくにわたらざりし宝法師ほうほつしにせめられにき。

法護三蔵ほうごさんざうは印度いんどの法華経をば見たれども、囑累ぞくゑいの先後せんごをば漢土かんどの人みねども、悞あやまりとい

ひしぞかし。設たとい慈じ覚かく、伝た教く大師たに値あい奉たりて習しい伝たえたりとも、智ち証し、義ぎ真しん和わ尚じに口く決けつせりといふとも、伝た教く・義ぎ真しんの正しょう文もんに相そう違いせば、あに不ふ審しんを加くえざらん。

伝た教く大師たの依え憑び集じゅうと申ます文ぶんは大師た第一だいの秘ひ書しょなり。彼かの書しよの序じよに云いく「新しん来らいの真しん言ごん家け

は則すなち筆ひつ授じゆの相そう承じようを泯ほろぼし旧く到とうの華け嚴げん家けは則すなち影えい響きやうの軌き範はんを隠かくし、沈ちん空くうの三さん論ろん宗しゅう

は弾たん訶がの屈くつ恥ちを忘われて称しょう心しんの酔よを覆おう。著じや有くうの法ほつ相そうは撲ぼく揚じやうの帰き依えを非なみ青せい竜りゅうの

判はん經ぎやうを撥はらう等たう。乃な至つ謹しんんで依え憑び集じゅう一いつ卷くわんを著あわして同どう我がの後こう哲てつに贈おくる。某それの時おこ興きやうる

こと日本にっぽん第五ご十二じふに葉えつ弘こう仁にんの七しち丙へい申まの歳さいなり」云い云い。次つぎ下しもの正しょう宗しゅうに云いく「天てん竺じくの

名だい僧とう、大き唐たう天てん台たいの教きやう迹じやく最さいも邪じや正しょうを簡かんぶに堪たえたりと聞きいて渴かつ仰じやうして訪ぼう問もんす」云い云い。

次つぎ下しもに云いく「豈あに中ちゆう国こくに法ほつを失しつて之これを四し維いに求もとむるに非しずや。而しかも此この方かたに識しるこ

と有ある者もの少すくし。魯ろ人じんの如ごときのみ」等らう云い云い。

此この書しよは法ほつ相そう・三さん論ろん・華け嚴げん・真しん言ごんの四し宗しゅうをせめて候ふ文ぶん也なり。天てん台たい・真しん言ごんの二に宗しゅう同どう一いつ味みな

らば、いかにかせめ候ふべき。而しかも不ふ空くう三さん藏ざう等らうをば魯ろ人じんのごとしなんどかかれて候ふ。善ぜん無む畏い



・金剛智・不空の真言宗いみじくば、いかでか魯人と悪口あるべき。又天竺の真言が天台宗に同じきも又勝れたるならば、天竺の名僧いかでか不空にあつらへ、中国に正法なしとはいふべき。

それはいかにもあれ、慈覚・智証の二人は言は伝教大師の御弟子とはなのらせ給えども、心は御弟子にあらず。其の故は此の書に云く「謹んで依憑集一卷を著わして同我の後哲に贈る」等云云。同我の二字は、真言宗は天台宗に劣るとならひてこそ、同我にはあるべけれ。我と申し下さるる宣旨に云く「専ら先師の義に違い偏執の心を成ず」等云云。又云く「凡そ厥師資の道一を闕いても不可なり」等云云。此の宣旨のごとくならば、慈覚・智証こそ専ら先師にそむく人にては候へ。かうせめ候もをそれにては候へども、此をせめずば、大日経・法華経の勝劣やぶれなんと存じて、いのちをまと(的)にかけてせめ候なり。此の二人の人々の弘法大師の邪義をせめ候わざりけるは最も道理にて候いけるなり。されば糧米をつくし、人をわづらはかして、漢土へわたらせ給は



と黒くろきと青あおきとはまがひぬべければ、眼まなこくらき人はあやまつぞかし。僧そうと男おとこと白しろと赤あかと  
 は目まなこくらき人も迷まよわず。いまなこわうや眼まなこあまなこきらかなる者をや。慈じ覚かく・智ち証しようの義ぎは法ほつ師しと尼あま  
くろきと黒くろきと青あおきとがあおきごとくなるゆへに、智ち人じんも迷まよい愚ぐ人にんもあやまり候こうて、此この四し百ひゃく余よ年ねんが間  
 は叡えい山ざん・園えん城じやう・東とう寺じ・奈な良ら・五ご畿き・七しち道どう・日に本ほん一いつ州しゅう皆ひら謗ぼう法ぽうの者ものとなりぬ。  
そもそ抑おさも法しよ華ぶつ經つにの第五ごに「文もん殊じゆ師しり利り此この法しよ華ぶつ經つには諸しよ仏ぶつ如に來らいの秘ひ密みつの藏ぞうなり。諸しよ經きやうの中なかに於おい  
 て最もつとも其その上かみに在あり」云い云い。此この經きやう文もんのごとくならば、法しよ華ぶつ經つには大だい日にち經きやう等とうの衆しゆ經きやうの  
 頂ちやう上じやうに住じゆし給じゆう正しやう法ぽうなり。さるにては善ぜん無む畏い・金こん剛かう智ち・不ふ空くう・弘こう法ぽう・慈じ覺かく・智ち証しよう  
こ等とうは此この經きやう文もんをばいかんが會えつ通つうせさせ給じゆうべき。法しよ華ぶつ經つにの第七だいに云いく「能よく是この經きやう典でんを  
 受じゆ持じすること有あらん者ものも亦か復ふく是この如ごとし。一いつ切きつ衆しゆ生じやうの中なかに於おいて亦これ為な第一だいなり」等とう云い云い。  
こ此この經きやう文もんのごとくならば、法しよ華ぶつ經つにの行せん者じやうは川せん流りゆう江かう河がの中なかの大海だい海かい、衆しゆ山せんの中なかの須しゆ弥み山せん、衆しゆ星せい  
 の中なかの月がつ天てん、衆しゆ明みやうの中なかの大だい日にち天てん、轉てん輪りん王おう・帝たい釈しやく・諸しよ王おうの中なかの大だい梵ぼん王おうなり。  
 伝でん教きやう大だい師しの秀しゆ句くと申まをす書しよに云いく「此この經きやうも亦か復ふく是この如ごとし乃ごと至し諸しよの經きやう法ぽうの中なかに最も

為第一なり。能く是の經典を受持すること有らん者も亦復是くの如し。一切衆生の中に於て亦為第一なり」。已上經文なりと引き入れさせ給いて次ぎ下に云く「天台法華玄に云く」等云云。已上玄文とかかせ給いて上の心を積して云く「当に知るべし。他宗所依の經は未だ最も為れ第一ならず。其の能く經を持つ者も亦未だ第一ならず。天台法華宗所持の法華經は最も為れ第一なる故に能く法華を持つ者も亦衆生の中の第一なり。已に仏説に拠る豈自歎ならん哉」等云云。次下に讓る積に云く「委曲の依憑具さに別卷に有るなり」等云云。

依憑集に云く「今吾が天台大師法華經を説き法華經を積すること群に特秀し唐に独歩す。明に知んぬ如来の使なり。讚る者は福を安。明に積み誇る者は罪を無間に開く」等云云。法華經・天台・妙樂・伝教の經。積の心のごとくならば、今日日本国には法華經の行者は一人もなきぞかし。

月氏には教主釈尊、宝塔品にして、一切の仏をあつめさせ給いて大地の上に居せし

め、大日如来ばか計りほうとう宝塔うちの中の南げざの下座にすにす（居）へ奉りて、教主じようぎ积尊は北の上座につかは北の上座につかにつかせ給う。此この大日如来は大日経の胎藏界たいざうかいの大日、金剛頂経の金剛界こんごうかいの大日の主君しゆくんなり。両部りようぶの大日如来を郎ろうじゆう 従等さだと定めたる多宝たほうぶつ仏じようぎの上座に教主い积尊居せさせ給う。此れ即ち法華経の行者なり。天竺てんじくかくのごとし。

漢土ちんていには陳帝なんぼくの時、天台大師げんしん南北にせめかちて現身に大師となる。「群ぐんに特とくしゆう 秀し唐とうに独歩どつぽす」といふこれなり。

日本国には伝教大師六宗にせめかちて日本の始め第一の根本こんぽん大師だいいしとなり給う。

月氏がつし・漢土かんど・日本にほんに但ただ三人ぼか計りこそ「於一切衆おいつさいしゆじようちゆうやくくだいいち 生中亦為第一にては候へ。されば秀句しゆうくに云く「浅あさきは易やすく深ふかきは難かたしとは积迦しやかの所判しよはんなり。浅あさきを去さつて深ふかきに就つくは丈夫じゆうぶの心なり。天台大師は积迦しんじゆんに信しん 順ほつして法華宗ほつげしゆうを助しんたんけて震旦ふように敷揚えいざんし叡山いつけの一家あいだは天台に相そうじよう 承しんして法華宗を助てけて日本に弘通くわうつうす」等云云。仏滅後は一千八百余年が間にに法華経の行者かんど漢土に一人、日本に一人、已上二人。积尊を加へ奉りて已上三人なり。

外典げてんに云く、聖人せいじんは一千年ひとたびに一出ひとたびで、賢人けんじんは五百年ひとたびに一出ひとたびづ。黄河こうがは涇けい・渭いなが  
 れをわけて、五百年はんがには半河はんがすみ、千年すには共に清すむ、と申すは一いちじよう定じようにて候けりけり。  
 然しかるに日本国えいざんばかは叡山えいざん計けいりに、伝教大師おんときの御時おんとき、法華経おんときの行者おんときましましけり。義真ぎしん・円澄えんちよう  
 は第一第二ぎすの座主ざすなり。第一ぎすの義真ぎす計げいり伝教大師おんときにいたり。第二ぎすの円澄えんちようは半なかばは伝教なかばの御  
 弟子なかば、半こうぼうは弘法こうぼうの弟子なかばなり。第三じかくだいしの慈覚じかくだいし大師じかくだいしは始めは伝教みでし大師みでしの御弟子おんとしにいたり、御年  
 四十ほうもんにて漢土まつたにわたりてより、名なは伝教ほうもんの御弟子まつた、其跡そのあとをばつがせ給ほうもんえども、法門まつたは全  
 く御弟子しかにはあらず。而しかれども円頓えんどんの戒かい計げいりは又御弟子かいげいにいたり。蝙蝠へんぷくちよう鳥ちようのごとし。  
 鳥きようちようきんにもあらず、ねずみにもあらず。梟きようちようきん鳥ちよう・禽けい・破鏡はけい獸じゆのごとし。法華経ほうもんの父ちを食くらい、  
 持者じしやの母はをかめるなり。日ひをい(射しや)るとゆめ(夢む)にみしこれなり。されば死去しきよの後のち  
 は墓はかなくてやみぬ。  
 智証ちしようの門家もんけおんじようじ園城寺もんけおんじようじと慈覚じかくの門家もんけえいざん叡山えいざんの、修羅しゆらと悪あく竜りゆうと合戦かつせんひまなし。園城寺おんじようじをやき  
 叡山えいざんをやく。智証ちしようだいし大師ほんぞんの本尊じしほさつの慈氏菩薩じしほさつもやけぬ。慈覚じかくだいし大師ほんぞんの本尊ほんぞん大講堂だいこうどうもやけぬ。

現身げんしんに無間地獄むげんじごくをかん(感)ぜり。但中ちゆうどうばか堂計りのこれり。

弘法大師こうぼうだいしも又跡あとなし。弘法大師の云く、東大寺の受戒じゆかいせざらん者をば東寺とうじの長ちやうじや者とす

べからず等、御おんいましめの状あり。しかれども寛かんびようほうおう平法王へいぽうおうは仁和寺にんなじを建こんりゆう立たてして、東寺とうじ

の法師ほつしをうつして、我寺わがてらには叡山えいざんの円頓戒えんどんかいを持たもた持もたらん者をば住じゆうせしむべからずと、

宣旨分せんじふんみよう明あきらなり。されば今の東寺とうじの法師ほつしは鑒真かんじんが弟子とにもあらず、弘法こうぼうの弟子とにもあ

ず。戒かいは伝でん教ぎやうの御弟子みでしなり。又伝教の御弟子みでしにもあらず、伝教でんぎやうの法華經ほつしを破失はしつす。

去いぬる承じやうわ和二年三月二十一日に死去しきよありしかば公家くげより遺体いたいをはほ(葬)らせ給たまひ、其後そのち

誑惑おうわくの弟子等あつま集りて、御入定ごにゆうじやうと云云。或あるはかみ(髪)をそりてまいらするぞといひ、

或あるは三鉢さんこをかん(漢土)よりなげたりといひ、或あるは日輪夜中にちりんやちゆうに出いでたりといひ、或あるは

現身げんしんに大日如来だいにちにちとなり給うといひ、或あるは伝教大師でんぎやうだいしに十八道じゅうはちだうををしえまいらせたりといひ

て、師しの徳とくをあげて智慧わがしにかへ、我師わがしの邪義じやぎを扶たすけて王臣おうしんを誑惑おうわくするなり。又高野山こうやさんに

本寺ほんじ・伝法院でんぽういんといひし二ふたの寺あり。本寺ほんじは弘法こうぼうのたてたる大塔大日如来だいたうだいにちによらいなり。

伝法院でんぼういんと申すは正覚房しょうかくぼうが立てし金剛界こんごうかいの大日だいにちなり。此本末このほんまつの二寺ちゆうや昼夜かつせんに合戦あり。

例せば叡山えいざん・園城おんじょうのごとし。誑惑おうわくのつもりて日本ふたつに二の禍わざわいの出現おうけんせるか。

糞ふんを集めて梅檀せんたんとなせども、焼く時は但糞ただふんの香かなり。大妄語だいもうごを集めて仏ぶつとがうすれども

但無間大城だむげんだいじょうなり。尼毘にけんが塔とうは数年りしやうこうだいが間、利生りしやうこうだい広大りしやうこうだいなりしかども、馬鳴菩薩めみやうぼさつの礼らいをう

けて忽たちまちにくづれぬ。鬼弁婆羅門きべんばらもんがとばり(帷たねん)は多年たねん人をたばらかせしかども、阿溼あす

縛婁沙菩薩ばくしやぼさつにせめられてやぶれぬ。留外道くるげどうは石いしとなつて八百年ちんなぼさつ、陳那菩薩ちんなぼさつにせめられて

水みづとなりぬ。道士どうしは漢土かんどをたばらかすこと数百年まとう、摩騰まとう・竺蘭じくらんにせめられて仙經せんきやうもや

けぬ。趙高ちやうこうが国くにをとりし、王莽おうもうが位くらいをうばいしがごとく、法華經ほふわきやうの位くらいをと(奪うば)て大

日經にちきやうの所領しよりやうとせり。法王ほふおうすでに国くにに失うせぬ。人王にんのうあに安穩あんのんならんや。日本国にっぽんこくは慈覺じかく・智証ちしやう

・弘法こうぼうの流ながれなり。一人いちにんとして謗法ほうぼうならざる人はなし。

但し事ことの心こころを案あんずるに、大莊嚴だいしようこんの末すえ、一切明王いっさいみやうおうぶつの末法まつぼうのごとし。威音王いおんのうぶつの

末法まつぼうには改悔かいげありしすら、猶なほ千劫阿鼻地獄せんせうあびじごくに墮おつ。いかにいわうや、日本国にっぽんこくの真言師しんごんし



・禪宗・念仏者等は一分の廻心なし。一如是展転至無數劫」疑いなきものか。かゝ

る謗法の国なれば天もすてぬ。天すつれば、ふるき守護の善神もほこらをやひ(焼)て

寂光の都へかへり給いぬ。但日蓮計り留まり居て告げ示せば、国主これをあだみ、

数百人の民に或は罵詈、或は悪口、或は杖木、或は刀杖、或は宅々ごとにせき、

或は家々ごとにをう。それになはねば、我と手をくだして二度まで流罪あり。去ぬる

文永八年九月の十二日には頸を切らんとす。

最勝王経に云く「悪人を愛敬し善人を治罰するに由るが故に他方の怨賊来つて

国人喪乱に遭う」等云云。

大集経に云く「若しは復諸の刹利国王有つて諸の非法を作して世尊の声聞の

弟子を悩乱し、若しは以て毀罵し刀杖をもつて打斫し及び衣鉢種種の資具を奪い、

若しは他の給施せんに留難を作さば我等彼れをして自然に他方の怨敵を卒起せしめん。

及び自界の国土にも亦兵起り病疫飢饉し非時の風雨鬪諍言訟せしめん。又其の王

をして久ひさしからざらしめ復また当たまに己おのが国こを亡ぼう失しつすべし」等云云。此等これらの經きようもん 文のごときは日蓮この国になくば、仏は大妄語だいもうごの人阿鼻地獄あびじごくはいかのがれで脱だつ給たまうべき。

去いぬる文永八年九月十二日に平左衛門並へいのさえもんびに数百人に向むかつて云く、日蓮は日本国のはしらこ(柱)なり。日蓮を失うほどならば日本国のはしらをたをす(倒)になりぬ等云云。此の經文に、智人ちじんを国主等こくしゆ若もしは悪僧等あくそうがざんげんにより、若もしは諸人しよにんの悪口あつくによて、失とがにあつるならば、にはかにいくさ(軍)をこり、又大風たいふうふかせ、他国よりせむべし等云云。去ぬる文永九年二月のどし(同士)いくさ、同じき十一年の四月の大風、同じき十月に大蒙古だいもうこの来きたりしは偏ひとえに日蓮がゆへにあらずや。いわうや前さきよりこれをかんがへたり。誰たれの人か疑たうべき。

弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしようの悞あやまり 並あびに禅ぜん 宗しんと念ねん 仏ぶつ 宗しんとのわざわい(禍)あいをこりて、逆ぎやく 風ふうに大波たいはをこり、大地震だいちしんのかさなれるがごとし。さればやうやく国をとろう。太政たじよう入にゆう 道どうが国ををさ(押)へ、承じようきゆう 久おういに王位おういつきはて、世東よひがしにうつりしかども、但ただ国中の

みだれにて他国のせめはなかりき。彼は謗法の者は国に充満せりといへどもさゝ(支)

へ頭あらわわす智人ちじんなし。かるがゆへに、なのめ(平)なりき。

譬たとへば師子のねぶれるは手をつけざればほへず。迅はやきな流は櫓をさゝへざれば波たかから

ず。盗人ぬすびとはとめざればいからず。火は薪たきぎを加えざればさかんならず。謗法ほうぼうはあれども

あらわす人なければ国もをだやかなるにいたり。例せば日本国に仏法ぶつぼうわたりはじめて候そうら

いしに、始はなに事もなかりしかども、守屋もりや仏をやき、僧をいましめ、堂塔どうとうをやきしか

ば、天より火の雨ふり、国にはうさう(瘡瘡)をこり、兵乱へいちらんつづきしがごとし。此これはそ

れにはなるべくもなし。謗法ほうぼうの人々も国に充満じゆうまんせり。日蓮が大義たいぎも強くせめかゝる。修羅しゆら

と帝たいしやく釈しやくと、仏まおうと魔王まおうとの合戦かつせんにもをとるべからず。

金光こんこう明みやう経きやうに云く「時に鄰国りんこくの怨敵おんてき是こくの如ごとき念ねんを興おこさん。まさに四兵しへいを具ぐして彼か

の国土こくどを壊やぶるべし」等云云。又云く「時に王見おう已おわつて即ち四兵しへいを嚴よそおいて彼の国かに発向はつこう

し討罰とうばつを為なさんと欲ほつす。我等われら爾その時にまさけんぞくに眷属むりよう無量むへん無辺やしやしよんの薬おのおの又か諸神しよじんと各おのおの形かを隠かくして

ためたに護助ごじよを作しな彼の怨敵おんてきをして自然じねんに降伏こうぷくせしむべし」等云云。最勝王さいしようおう経きようの文ぶん又か  
くのごとし。大集だいしつ経きよう云云。仁王にんのう経きよう云云。

これらこ此等しやうぼうの経きようもん 文ぶんのごときんば、正しやうぼう法ぽうを行ぎやうずるものこくしゆを国主こくしゆあだみ、邪法じやほうを行ぎやうずる者もののか  
たうどせば、大梵天王だいぼんてんのう・帝たいしやく 釈にちがつ・日月してん・四天等りんごく、鄰国けんのうの賢王けんの身みに入りいかわりて其国そのくに  
をせむべしとみゆ。例れいせば訖利多王きりたおうを雪山せつせん山下王げおうのせめ、大族王だいぞくおうを幻日王げんにちおうの失うしないしが  
ごとし。訖利多王きりたおうと大族王だいぞくおうとは月氏がつしの仏法ぶつぽうを失うしないし王うしなぞかし。漢土かんどにも仏法ぶつぽうをほろぼ  
し、王けんおう、みな賢王けんおうにせめられぬ。

これは彼かれにはにはにるべくもなし。仏法ぶつぽうのかたうどなるやうにて、仏法ぶつぽうを失ほつしう法師ほつしのかたう  
どをするゆへに、愚者ぐしやはすべてしらず、智者ちしやなんども常つねの智人ちじんはしりがたし。天てんも下劣げれつ  
の天人てんにんは知らずもやあるらん。されば漢土かんど月氏がつしのいにしへ(古)のみだれよりも大きな  
るべし。

ほうめつじんきよう  
法滅尽ほうめつじんきよう 経きんきように云く「吾はつ般ない泥洹おんの後のち五ご逆濁世ぎやくじよくせに魔道興まどうこうじよう 盛まし魔ま 沙門しゃもんと作なつて吾わが道みちを

壊乱えらんせん。乃至あくにんうたた悪人あくにん 転多かいちゆうく海かい 中いさごの沙ごの如ごく善者ぜんしや甚はなはだ少すくなくして若もしは一若もしは二こ」  
 云云。涅槃ねはんぎよう經ぎように云く「是かくの如ごき等ちの涅槃ねはんぎよう經典きんべんを信しんずるものは抓そうじよう 上つちの土ごの如ごし乃至こ是  
 の經ぎようを信しんぜざるものは十方じつぽうかい界かいの所有しよゆうの地土ちどの如ごし」等云云。此このきようもん 經文ぎもんは予よが肝きもに染そみ  
 ぬ。当世とうせ日本国にっぽんこくには我われも法華ほふわ經ぎようを信しんじたり／＼。諸人しよにんの語ごのごときんば一人ひとりも謗法ほうぼうの者  
 なし。此このきようもん 經文ぎもんには、末法まつぽうに謗法ほうぼうの者じつぽう十方じつぽうの地土ちど、正法しよぼうの者そうじよう爪つち 上つちの土ご等云云。經文ぎようもん  
 と世間せけんとは水火すいかなり。世間せけんの人ひと云く、日本国にっぽんこくには日蓮にっれん一人ひとり計ばかり謗法ほうぼうの者もの等云云。又經文ぎようもん  
 には天地てんちせり。法滅ほうめつ盡じん 經ぎようには善者ぜんしや一・二人ひとりふたり。涅槃ねはんぎよう經ぎようには信者しんじや爪つち 上つち等云云。經文ぎようもん  
 のごとくならば、日本国にっぽんこくは但ただ日蓮にっれん一人ひとりこそ爪そうじよう 上つち土ご・一二人ひとりふたりにては候まうへ。經文ぎようもんをか用もち  
 うべき、世間せけんをか用もちうべき。  
 問うて云く、涅槃ねはんぎよう經ぎようの文ぶんには、涅槃ねはんぎよう經ぎようの行者ぎやうじやは爪そうじよう 上つちの土ご等云云。汝なんじが義ぎには法華ほふわ經ぎよう等  
 云云いかにん如何いかにん。  
 答えて云く、涅槃ねはんぎよう經ぎように云く「法華ほふわの中なかの如ごし」等云云。妙みよ 樂大師らくだいし云く「大だい 經ぎよう自ら法ほふわ

華を指して極と為す」等云云。大經と申すは涅槃經也。涅槃經には法華經を極と指て  
 候なり。而るを涅槃宗の人の涅槃經を法華經に勝ると申せしは、主を所従といひ、下郎  
 を上郎といひし人なり。涅槃經をよむと申すは法華經をよむを申すなり。譬へば、賢人  
 は国主を重んずる者をば我をさぐれども悦ぶなり。涅槃經は法華經を下て我をほむる  
 人をば、あながちに敵とにくませ給う。此の例をもつて知るべし。華嚴經・觀經・  
 大日經等をよむ人も法華經を劣るとよむは彼々の經々の心にはそむくべし。此をも  
 つて知るべし。法華經をよむ人の此經をば信ずるやうなれども、諸經にても得道な  
 る(成)とおもうは、此經をよまぬ人なり。  
 例せば嘉祥大師は法華玄と申す文十卷造りて、法華經をほめしかども、妙樂かれをせ  
 めて云く、「毀其の中に在り何ぞ弘讚と成さん」等云云。法華經をやぶる人なり。され  
 ば嘉祥は落ちて、天台につかひ(仕)て法華經をよまず。我れ經をよむならば惡道まぬ  
 がれがたしとて、七年まで身を橋とし給いき。慈恩大師は玄賛と申して法華經をほむる文

十卷あり。伝教大師せめて云く「法華経を讚ほむるといへども還かえつて法華の心を死ころす」等云云。

これら此等をもつてをもうに、法華経をよみ讚さんたん歎する人々の中に無間地獄は多く有るなり。嘉祥

・慈恩じおんすでに一乗いちじょう誹謗の人ぞかし。弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしょうあに法華経蔑如の人にあらずや。

嘉祥大師のごとく講を廃し衆を散じて身を橋となせしも猶なおや已前の法華経誹謗の罪

やきへざるらん。不ふき軽きよう毀きの者は不ふき軽きよう菩薩ぼさつに信しん伏ふく随ずい 従じゆうせしかども、重じゆう罪ざいいまだの

こりて干劫阿鼻せんごうあびに墮おちぬ。されば弘法こうぼう・慈覚じかく・智証ちしょう等は設たいひるがへす心ありとも尚なお

法華経をよむならば重じゆう罪ざいきへがたし。いわうやひるがへる心なし。又法華経を失うしない、

真言しんごん教きようを昼夜ちゆうやに行い、朝暮ちようぼに伝法でんぽうせしをや。

世親せしん菩薩ぼさつ・馬鳴めみ菩薩ぼさつは小しょうをもて大だいを破はせる罪つみをば、舌したを切きらんとこそせしか。世親せしん菩

薩ざつは仏説ぶつせつなれども阿含あこん経きやうをばたわふれにも舌うえの上うへにをかじとちかひ、馬鳴めみ菩薩ぼさつは懺悔ざんげの

ために起信論きしんろんをつくりて小乗じようじやうをやぶり給たまいき。

嘉祥大師かじようだいしは天台大師を請しやうじ奉りて、百余人の智者ちしやの前にして五体を地ごたいになげ、徧身へんしんに  
 あせ(汗)をながし、紅くれなゐのなんだをながして、今よりは弟子を見じ、法華經をかう(講)  
 ぜじ。弟子の面おもてをまほり法華經をよみたてまつれば、我わがちから力の此このきよう經を知るしに(似)  
 たりとて、天台よりも高僧老僧こうそうろうそうにておはせしが、わざと人のみるときをひ(負)まいら  
 せて河かわをこへ、かうざ(高座)にちかづきてせなか(背)にのせまいらせ給たまいて高座こうざに  
 のぼせたてまつり、結句御臨終けつくごりんじゆうの後のちには、隋ずいの皇帝こうていにまい(参)らせて、小児しようにが母に  
 をくれたるがごとくに足をすりてなき給たまいしなり。嘉祥大師かじようだいしの法華玄ほつけげんを見るに、いたう  
 法華經を謗ほうじたる疏しよにはあらず。但ただ法華經と諸大乘經とは門もんは浅深せんじんあれども心はひとつ  
 かきてこそ候へ。此これが謗法ほうぼうの根本こんぽんにて候か。  
 華嚴けこんの澄ちようかん觀しんこんも真言ぜんむいの善無畏ぜんむいも大日經と法華經とは理りはひとつ  
 とが(科)あらば善無畏ぜんむい三蔵さんざうも脱のがれがたし。されば善無畏三蔵ちゆうてんは中こくしゆ天の国主くらいなり。位  
 をすてて他国しゆしやうにいたり、殊勝しゆしやう・招提しやうだいの二人にあひて法華經をうけ、百千の石の塔とくを立



てしかば、法華經の行者とこそみへしか。

しかれども大日經を習いしよりこのかた、法華經を大日經に劣るとやをもひけん。始はじめは

いたう其義そのぎもなかりけるが、漢土かんどにわたりて玄宗皇帝げんそうこうていの師しとなりぬ。天台宗をそねみ思

う心つき給たまいけるかのゆへに、忽たちまちに頓死とんしして、二人の獄卒ごくそつに鉄くろがねの繩なわ七つけられ

て、閻魔王宮えんまおうぐうにいたりぬ。命いのちいまだつきずといみてかへされしに、法華經謗法ほうぼうとやを

もひけん、真言しんごんの觀念かんねん・印いん・真言等しんごんをばなげすて、法華經の今此こんし三界さんがいの文もんを唱となえて繩なわ

も切れ、かへされ給たまいぬ。又雨あめのいのりををほせつけられたりしに、忽たちまちに雨あめは下ふりたり

しかども、大風たいふう吹きて国くにをやぶる。結句けつくし死しし給たまいてありしには、弟子等でしとう集りて臨りんじゆう終しゆうい

みじきやうをほめしかども、無間大むげんだいじよう城おに墮おちにき。

問なうて云く、何なにをもつてかこれをしる。

答こたえて云く、彼伝かのでんを見るに云く、「今畏いまいの遺形いぎようを觀みるに漸ようやく加縮ますますしゆくしよう 小こくひんし黒皮隱いん々

として骨其それあらわ 露つゆなり」等云云。彼の弟子等でしとうは死後しごに地獄じごくの相そうの頭あわられたるをしらずして、徳とく

をあぐなどをもへども、かきあらはせる筆は畏が失をかけり。死してありければ、身や  
 ふやくつづま（縮）りちひさ（小）く、皮はくろ（黒）し、骨あらわ（露）なり等云云。  
 人死して後、色の黒きは地獄の業と定むる事は仏陀の金言ぞかし。善無畏三蔵の地獄  
 の業はなに事ぞ。幼少にして位をすてぬ。第一の道心なり。月氏五十余箇国を修行  
 せり。慈悲の余りに漢土にわたれり。天竺・震旦・日本・一閻浮提の内に真言を伝へ鈴  
 をふるこの人の功德にあらずや。いかにして地獄には墮ちけると、後生ををまん人々  
 は御尋ねあるべし。

又金剛智三蔵は南天竺の大王の太子なり。金剛頂經を漢土にわたす。其徳善無畏  
 のごとし。又互に師となれり。而るに金剛智三蔵勅宣に於て雨の祈りありしかば七日  
 が中に雨下る。天子大に悦ばせ給うほどに忽に大風吹き来る。王臣等けうさめ（興  
 覚）給いて使をつけて追はせ給いしかども、とかうのべて留し也。結句は姫宮の  
 御死去ありしに、いのりをなすべしとて、身の代に殿上の二の女子七歳になりしを、

薪たきぎにつみこめて焼やき殺ころせし事ことこそ、無むざん慚ざんにはをぼゆれ。而しかれども姫ひめ宮みやもいきかへり給たまはず。

不ふ空くう三さん藏ざうは金こん剛ごう智ちと月が支つしより御おんともせり。此これ等らの事ことを不ふ審しんとやおもひけん。畏いと智ちと入にゆめつのち、月が氏つしに還かえりて童り智ゆうに値あい奉ほうり、真しん言ごんを習まないなを(直ち)し、天台宗たいたいしゆうに帰き伏ふくしてありしが、心こころ計はかりは帰かえれども身みはかへる事ことなし。雨あめの御おんいのりうけ給たまわりたりしが、三みつ日かと申まをすに雨あめ下くだる。天子てんし悦よろこばせ給たまいて我われと御おん布ふ施せひかせ給たまう。須し臈ゆわくありしかば、大おほ風かぜ落おち下くだりて内うち裏らをも吹ふきやぶり、雲うん閣かく月げつ卿けいの宿しゆく所ところ一ひと所ところもあるべしともみへざりしかば、天子てんし大おほに驚おどきて宣せん旨じなりて風かぜをとどめよ。且しばらくありては又また吹ふき、又また吹ふきせしほどに、

数かず日ひが間まやむことなし。結け句こは使つかいをつけて追おうてこそ、風かぜもやみてありしか。

此この三人さんにんの悪あく風ふうは漢かん土ど日本にっぽんの一切いっけつの真まこと言ごん師しの大たい風ふうなり。さにてあるやらん。去いぬる文ぶん永えい十じゆ一年いちねん四月しがつ十二じふに日にちの大たい風ふうは、阿あ弥みだ陀だ堂どう加か賀が法ぼう印いん東とう寺じ第一だいいちの智ち者しやの雨あめのいのりに吹ふきたりし逆ぎやく風ふうなり。善ぜん無む畏い・金こん剛ごう智ち・不ふ空くうの悪あく法ぼうをすこしもたがへず伝つたえたりけるか。心こころにく

し心にくし。

弘法大師は去ぬる天こうぼうだいし 長元年の二月大旱魃てんちようのありしに、先には守敏祈雨だいかんぱつして七日が内さきに雨を下すしゅびんあまごい。但し京うち中にふりて田舎いなかにそゝがず。次に弘法承取こうぼううけとりて一七日に雨氣いちしちにちなし、二七日に雲なしあまけ。三七日と申せしに、天子つぎより和氣こうぼううけとりの真綱いししやを使者ぬさとして御幣しんせんえんを神泉苑みづいんにまいらせたりしかば雨下事ふること三日。此これをば弘法大師並に弟子等こ此の雨をうばひとり、我わが雨として今いまに四百余年、弘法の雨あめという。慈覚大師の夢じかくだいしに日輪にちりんをい(射)しと、弘法大師の大妄語だいもうごに云く、弘仁九年の春大疫だいえきをいのりしかば夜中やちゆうに大日輪出だいにちりんしゆつげん現せりと云云。成じようこう劫このかたじゆうこうより已来住このかたじゆうこう劫げんの第九の滅げん、已上こ二十九劫あいだが間にちりんやちゆうに日輪夜中いに出でしという事なし。

慈覚大師は夢じかくだいしに日輪にちりんをいるという。内典ないてん五千七千、外典げてん三千余卷にちりんに、日輪にちりんをいるとゆめさちむにみるは吉夢きちむという事ことあ有りやいなや。修羅しゆらは帝たいしやく釈しやくをあだみて日天にちてんをいたてまつる。其そのや矢やかへりて我が眼まなこにたつ。殷いんの紂ちゆうおう王にってんは日天まを的みにいて身を亡ほろぼす。日本の神武天皇じんむてんのう

の御時おんとき、度美長とみのおさと五瀬命いつせのみことと合戦かつせんありしに、命みことの手に矢やたつ。命みことの云われく、我われはこれ日天ひのかみ  
 の子孫うみのこなり。日ひに向むかい奉ゆみりて弓ゆみをひくゆへに、日天にってんのせめをかをほれりと云云。  
 阿闍世王あじやせおうは仏きに帰きしまいらせて、内裏だいりに返かえりてぎよしん(御寝)なりしが、おどろいて諸臣しよしん  
 に向むかつて云く、日輪天にちりんそらより地ちに落おつとゆめにみる。諸臣しよしんの云く、仏ぶつの御入滅ごにゆうめつか云云。  
 須跋陀羅しゆばつだらがゆめ又かくのごとし。我國わがくには殊ことにいむ(忌)べきゆめなり。神かみをば天あまてらす 照あと  
 いう。国くにをば日本にっぽんという。又教きよう主釈しゆしやくそん 尊そんをば日種にっしゆと申まをす。摩耶夫人まやぶにんひ日ひをはらむとゆめ  
 にみてまうけ給たまへる太子たいしなり。慈覚大師じかくだいしは大日如来だいにちにがひを叡山えいざんに立たて釈迦しやくか仏ぶつをすて、真言しんごんの  
 三部経さんぶきやうをあがめて法華経ほふけきやうの三部さんぶの敵てきとなりしゆへに、此夢出このゆめしゆつげん 現あらせり。  
 例れいせば漢土かんどの善導ぜんどうが始はじめは密州みつしゆうの明勝みやうしやうといるし者に値あうて、法華経ほふけきやうをよみたりしが、  
 後のちには道綽どうしやくに値あうて法華経ほふけきやうをすて、観經かんぎやうに依よりて疏しよをつくり、法華経ほふけきやうをば千中せんちゆう無む一いつ、  
 念仏ねんぶつをば十即十じつそくじつしやう 生百ひやくそく 即百じつひやく 生ひやくそくと定まめて、此義このぎを成じやうぜんがために阿弥陀仏あみだぶつの御前おんまえ  
 にして祈誓きせいをなす。仏意ぶつちに叶かなうやいなや、毎夜夢まいよの中に常なに一ひとの僧そう有あり、来きたりて指授しじゆす

と云云。乃至もつばらきようぼう一經いちぎやう法の如くせよ乃至かんねんほうもんぎよう觀念法門くわんねんほうもん經等云云。法華經には「もし法を聞  
く者有れば一として成じやうぶつ仏せざる無し」と。善導ぜんどうは「千の中に一も無し」等云云。法華  
經と善導とは水火也すいか。善導は觀かんぎよう經をば十即十じつそくじつしやうひやくそくひやくしやう生百じふひやく即百じふひやく生と。  
無量義經むりやうぎきやうに云く、觀かんぎよう經は「未だ眞実を顯あらわさず」等云云。無量義經と楊柳房やうりゆうぼうとは天地  
也。此これを阿弥陀仏あみだぶつの僧と成りて来つて眞まことなりと証しやうせばあに眞事ならんや。抑そもそも阿弥  
陀は法華經の座ざに來りて、舌したをば出いだし給たまはざりけるか。觀音かんのん・勢至せいしは法華經の座ざには  
なかりけるか。此これをもてをもへ、慈覺大師じかくだいしの御夢はわざわひなり。  
問うて云く、弘法大師こうぼうだいしの心しんぎよう經の秘鍵ひけんに云く「時に弘仁九年こうにんの春天下大疫てんかたいえきす。爰こゝに  
皇帝こうてい自ら黄金おうごんを筆端ひつたんに染め紺紙こんしを爪そうしやう掌にぎに握りて般若心はんになしんぎやう經一卷しよしやを書写しよしやし奉りたも  
う。予よ講読かうどくの撰せんに範のつとりて經旨きやうしの宗むねを綴つづる。いまだ結願けちがんの詞ことばを吐はかざるに蘇生そせいの族やからみち途た  
にたたた夜よ變へんじて日光にっこう赫かく々かくたり。是れ愚身ぐしんの戒徳かいとくに非あらず。金輪こんりんの御信力ごしんりきの所為しよいなり。但ただ  
し神舍じんしゃに詣もつでん輩ともがらはこの秘鍵ひけんを誦じゆし奉たてまつれ。昔予よ鷲峰じゆほう説法せつぼうの筵むしろに陪ばいして親したしくそ

の深文じんもんを聞きたてまつる。豈あにその義ぎに達たつせざらんや」等云云。

又孔雀くじやくきよう經おんぎの音義おんぎに云く「弘法大師こうぼうだいし帰朝きしちようの後真のちしんごんしゆう言宗ごんしゆうを立てんと欲ほつし諸宗しよしゆうを朝ちようてい廷ていに群集ぐんじゆうす。即身成そくしんじようぶつ。仏ぶつの義ぎを疑ぎう。大師だいしちけん智拳ちけんの印いんを結むすびて南方なんぼうに向むかうに面門めんもん俄ひらに開ひらいて金色こんじきの毘盧遮那びるしやなと成なり即便すなわちほんたい本体ほんたいに還げん歸きす。入我にゆうががにゆう我入ごごにゆうの事こと即身そくしん頓とん証しゆうの疑ぎいこの

日積しやくねん然ぜんたり。しかるに真言しんごん瑜伽ゆがの宗秘しゆうひ密曼みつまん茶羅たらの道みち彼かの時ときより建こんりゆう立たしぬ」。又云

く「この時に諸宗かくとの学徒がくと大師きに歸きして始めて真言えを得えて請しゆうやく益しゆうやくし習しゆうやく学しゆうやくす。三論さんろんの道どう昌しやう・法相ほつそうの源仁げんにん・華嚴けごんの道雄どうゆう・天台てんだいの円えん澄等ちやうとう皆たぐいその類たぐいなり」。

弘法大師こうぼうだいしの伝でんに云く「帰朝きちよう泛舟はんしゆうの日ひ発願ほつがんして云く我が所学しよがくの教きやう法ほつもし感応かんのうの地有ちあらばこの三鉢さんぱつその処ところに到いたるべしと。よつて日本かたの方むけに向むけて三鉢さんぱつを抛なげ上あぐ遙はるかに飛とんで雲くもに入る。十月じつごに帰朝きちようす」云云。又云く「高野山こうやさんの下したに入にゆうじよう定じやうの所ところを占しむ。乃至な彼かの海かいじよう上の三鉢さんぱつ今新あらたに此こゝに在あり」等云云。大師だいしの徳無量とくむりやうなり。其その両三りやうさんを示しす。かくのごとくの大徳だいとくあり。いかんが此人このを信しんぜずして、かへりて阿鼻地獄あびじごくに墮おつるといはんや。

答えて云く、予も仰いで信じ奉る事かくのごとし。但し古の人々も不可思議の徳あり  
 しかども、仏法の邪正は其にはよらず。外道が或は恒河を耳に十二年留め、或は大海  
 をすひ（吸）ほし、或は日月を手ににぎり、或は釈子を牛羊となしなんどせしかど  
 も、いよいよ大慢をこして生死の業とこそなりしか。此をば天台云く、「名利を邀め見愛  
 を増す」とこそ釈せられて候へ。光宅が忽に雨を下し須臾に花を感ぜしをも、妙樂  
 は「感応かくの如くなれどもなお理に称わず」とこそかかれて候へ。されば天台大師の  
 法華経をよみて須臾に甘雨を下せ、伝教大師の三日が内に甘露の雨をふらしてをはせし  
 も、其をもつて仏意に叶うとはをほせられず。弘法大師いかなる徳ましますとも、法華  
 経を戲論の法と定め、釈迦仏を無明の辺域とかかせ給へる御ふで（筆）は、智慧かし  
 こからん人は用うべからず。いかにいわうや、上にあげられて候徳どもは不審ある事な  
 り。

「弘仁九年の春天下大疫等云云。春は九十日、何の月何の日ぞ。是一。又弘仁九年



には大疫ありけるか。是二。又「夜変じて日光赫赫たり」と云云。此事第一の大事なり。弘仁九年は嵯峨天皇の御宇なり。左史右史の記に載せたりや。是三。設い載せたるとも信じがたき事なり。成劫二十劫・住劫九劫、已上二十九劫が間にいまだ無き天変也。夜中に日輪の出現せる事如何。又如來一代の聖教にもみへず。未來に夜中に日輪出ずべしとは三皇五帝の三墳五典にも載せず。仏經のごときんば、滅劫にこそ一日の日三の日乃至七の日は出ずべしとは見えたれども、かれは昼のことぞかし、夜日の現せば東西北の三方は如何。設い内外の典に記せずとも、現に弘仁九年の春、何れの月、何れの日、何れの夜の、何れの時に日出ずるといふ。公家・諸家・叡山等の日記あるならば、すこし信ずるへんもや。

次下に、「昔予鷲峰説法の筵に陪して親くその深文を聞く」等云云。此筆を人信ぜさせしめんがために、かまへ出だす大妄語か。されば靈山にして法華は戲論、大日經は真実と仏の説き給いけるを、阿難・文殊が悞りて妙法華經をば真実とかけるか、

いかん。いうにかいなき姪女・破戒の法師等が歌をよみて雨す雨を、三七日まで下さりし人はかゝる徳あるべしや。是四。

孔雀経の音義に云く、「大師智拳の印を結びて南方に向うに面門俄かに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云云。此又何れの王、何れの年時ぞ。漢土には建元を初めとし、日本には大宝を初めとして、緇素の日記、大事には必ず年号のあるが、これほどの大事にいかでか王も臣も年号も日時もなきや。

又次に云く、「三論の道昌・法相の源仁・華嚴の道雄・天台の円澄」等云云。抑

も円澄は寂光大師天台第二の座主なり。其時何ぞ第一の座主義真、根本の伝教大師

をば召さざりけるや。円澄は天台第二の座主、伝教大師の御弟子なれども、又弘法大師

の弟子なり。弟子を召さんよりは、三論・法相・華嚴よりは、天台の伝教・義真の二

人を召すべかりけるか。而も此日記に云く、「真言瑜伽の宗秘密曼荼羅の道彼の時より

建立しぬ」等云云。此筆は伝教・義真の御存生かとみゆ。弘法は平城天皇大同二

年より弘仁十三年までは盛に真言をひろめし人なり。其時は此二人現にをはします。又義真は天長十年までおはせしかば、其時まで弘法の真言はひろまらざりけるか。かたがた不審あり。

孔雀經の疏は弘法の弟子真済が自記なり。信じがたし。又邪見者か。公家・諸家・円澄の記をひかるべきか。又道昌・源仁・道雄の記を尋ぬべし。「面門俄かに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云云。面門とは口なり。口の開けたりけるか。眉間開くとかゝんとしけるが、悞りて面門とかけるか。ぼう（謀）書をつくるゆへにかかるあやまりあるか。

「大師智拳の印を結びて南方に向うに面門俄かに開いて金色の毘盧遮那と成る」等云云。涅槃經の五に云く「迦葉仏に白して言さく、世尊我今是の四種の人に依らず、何を以ての故に。瞿師羅經の中の如き、仏瞿師羅が為に説きたまわく、もし天魔梵破壊せんと欲するが為に變じて仏の像と為り、三十二相八十種好を具足し莊嚴し円光一尋

めんぶえんまん  
 面部円満なること猶月の盛なほ 明なるがごとく、眉間の毫相まげん ごうそう白きこと珂雪かせつに踰え、乃至  
 左の脇わきより水を出し右の脇わきより火を出す」等云云。又六卷に云く「仏迦葉かしように告げたまわ  
 く、我般涅槃われはつねはんして乃至後のちこ是の魔波旬まはじゆんようや 漸くまさに我われの正しようぼう法そえを沮壞すべしすべし。乃至化け  
 て阿羅漢あらかんの身み及び仏の色身しきしんと作り魔王まおうこの有漏うろの形かたちを以て無漏むろの身みと作り我が正しようぼう法そえ  
 を壞やぶらん」等云云。  
 こうぼうだいし  
 弘法大師は法華經を華嚴經・大日經だいにてちきように対して戲論等云云。而も仏身ぶつしんを現げんず。此涅槃これ  
 經けいには魔有漏まうろの形かたちをもつて仏となつて我わが正しようぼう法そえをやぶらんと記し給う。涅槃經ねはんぎようの正しようぼう法そえ  
 は法華經なり。故ゆえに經の次下の文もんに云く「久ひさく已すでに成じようぶつ 仏ぶつす」。又云く「法華の中の如ごと  
し」等云云。釈迦しやか・多宝たほう・十方じつぼうの諸しよ佛ぶつは一切經しよに対して法華經は真実、大日經等の一切  
 經は不真実等云云。弘法大師は仏身ぶつしんを現げんじて華嚴經・大日經に対して法華經は戲論等云  
 云。仏説ぶつせつまことならば弘法こうぼうは天魔てんまにあらずや。又三鈷さんこの事こと、殊ことに不審ふしんなり。漢土かんどの人の  
 日本きたに來りてほり（掘）いだすとも信じがたし。已前いぜんに人をやつかわしてうづみ（埋）

けん。いわうや弘法こうぼうは日本の人、かゝる誑乱おうらん其数多し。此等これらをもつて仏意ぶつちに叶かなう人の証拠しょうことはしりがたし。

されば此真言このしんごん・禅ぜんしゆう宗ねんぶつ・念仏等ねんぶつやうやくかうなり来る程きたほどに、人王にんのう八十二代尊成たかなりおき隱岐おきの法王ほうおう権太夫殿ごんのたいふどのを失うしなわんと年としごろはげませ給たまいけるゆへに、国主こくしゆなればなにとなくとも、師子王ししおうの兔うさぎを伏ふくするがごとく、鷹たかの雉きじを取るやうにこそあるべかりし上うへ、叡山えいざん・東寺とうじ・園城おんじよう・奈良なら七しち大寺だいたいじ・天照てんしやうだいいじん太神たいじん・正八幡しょうはちまん・山王さんかう・加茂かすが・春日等かすがに数年すうねんが間ま、  
あるい ちようぶく、あるい かみ  
或あるいは調伏ちようぶく、或あるいは神かみに申まをさせ給たまいしに、二日三日ふたつみっかだにもさゝへかねて、佐渡国さどくに・阿波国あわくに  
おきのくに

・隱岐国等おきのくににながし失うせて終ついにかくれさせ給たまいぬ。

調伏ちようぶくの上じようしゆ首御室おむろは但東寺ただとうじをかへらるゝのみならず、眼まなこのごとくあひあひ(愛)せさせ給たまいし第一てんどうの天童勢多伽せいたかが頸切くびられたりしかば、調伏ちようぶくのしるし還げん著ちやく於本人おほんにんのゆへとこそ見みへて候まをへ。これはわづかの事ことなり。此後このちさだ定さだんで日本の国臣こくしん万民ばんみん一人いちにんもなく、乾草かれくさを積つみて火ひを放はなつがごとく、大山たいせんのくづれて谷たにをうむるがごとく、我わが国他国たこくにせめら

るる事出 来すべし。

このこと

此事日本国の中に但日蓮一人計りしれり。いゝいだすならば、殷の紂王の比干が胸

をさきしがごとく、夏の桀王の竜蓬が頸を切りしがごとく、檀弥羅王の師子尊者が頸

を刎ねしがごとく、竺の道生が流されしがごとく、法道三蔵のかなやき（火印）をや

（焼）かれしがごとくならんずらんとはかねて知りしかども、法華経には「我身 命を愛

せず但無上道を惜しむ」ととかれ、涅槃経には「寧身 命を喪うとも教を匿さざれ」

といさめ給えり。

こんどのち

今度命をおしむならば、いつの世にか仏になるべき、又何なる世にか父母師匠をもすく

ひ奉るべきと、ひとへにをもひ切りて申し始めしかば、案にたがはず、或は所をおひ、或

はのり、或はうたれ、或は疵をかうふるほどに、去ぬる弘長元年辛酉五月十二日

に御勘気をかうふりて、伊豆国伊東にながされぬ。又同じき弘長三年癸亥二月二十二

日にゆりぬ。其後 弥 菩提心強 盛にして申せば、いよいよ大難かさなる事、大風に

大波たいはの起おこるがごとし。昔ふきようの不ぼ軽さつ菩薩じようもくの杖じようもく 木きのせめも我身わがみにつみしられたり。覺徳かくとく比丘びく  
 が歡喜かんぎ仏ぶつの末すえの大難だいなんも此これには及およばじとをぼゆ。日本にっぽん六十六箇国しまつたつ嶋なか 一な二かの中に一日片時かたとき  
いすも何いれの所しよにすむべきやうもなし。古いにしえは二百五十戒たもをもちて忍辱にんにくなる事羅ちろうん云んのごとく  
 なる持戒じかいの聖しようにん 人も、富楼那ふるなのごとくなる智者ちやも、日蓮にんに値あいぬれば悪口あつくをはく。正しよう直じき  
 にして魏徵ぎちよう・忠仁ちゆうじん 公こうのごとくなる賢者けんじや等らも、日蓮にんを見ては理りをまげて非ひとをこなう。  
 いわうや世間せけんの常つねの人々ひとは犬いぬのさる(猿)をみたるがごとく、獵師りようしが鹿しかをこめたるに  
 たり。

日本国なの中に一人ひととして故ゆえこそあるらめという人ひとなし。道理どうりなり。人ひとごとに念仏ねんぶつを申ます、  
 人ひとに向むかうごとに念仏ねんぶつは無間むげんに墮おつるといふゆへに。人ひとごとに真言しんごんを尊とうとむ、真言しんごんは国くにを  
 ほろぼす悪法あくほうという。国主こくしゆは禅ぜん 宗しゆを尊とうとむ、日蓮てんまは天魔てんまの所為しよいというゆへに。我われと招まね  
 けるわざわひなれば人ののるをもとがめず。とがむとても一人ひとりならず。打うつをもいたまず、  
 本もとより存ぞんぜしがゆへに。かういよいよ身みもをしましめしかば、禅僧ぜんそう数百人ひゃくにん、念仏ねんぶつ者しや

数千<sup>しんじん</sup>人、真言師<sup>しんじん</sup>百千人、或<sup>あるい</sup>は奉行<sup>ぶぎょう</sup>につき、或<sup>あるい</sup>はきり人<sup>あるい</sup>(権家)につき、或<sup>あるい</sup>はきり女房<sup>にようぼう</sup>  
 (権閥)につき、或<sup>あるい</sup>は後家尼御前等<sup>ごけあまごぜん</sup>につきて無尽<sup>むじん</sup>のざんげんをなせし程<sup>ほど</sup>に、最後<sup>さいご</sup>には天下<sup>てんか</sup>  
 第一<sup>だいじ</sup>の大事<sup>だいじ</sup>日本国<sup>うしな</sup>を失<sup>うしな</sup>わんと咒<sup>じゆ</sup>そ(咀)する法師<sup>ほつし</sup>なり。故<sup>こ</sup>最明<sup>さいみやう</sup>寺殿<sup>じどの</sup>・極楽<sup>ごくらく</sup>寺殿<sup>じどの</sup>を無間<sup>むげん</sup>  
 地獄<sup>じじく</sup>に墮<sup>お</sup>ちたりと申<sup>おんたず</sup>す法師<sup>おんたず</sup>なり。御尋<sup>おんたず</sup>ねあるまでもなし。但<sup>ただ</sup>須臾<sup>しゆゆ</sup>に頸<sup>くび</sup>をせめ。弟子<sup>でし</sup>等を  
 ば又<sup>あるい</sup>或<sup>あるい</sup>は頸<sup>くび</sup>を切り、或<sup>あるい</sup>は遠<sup>おん</sup>国<sup>ごく</sup>につかはし、或<sup>あるい</sup>は籠<sup>ろう</sup>に入れよと、尼<sup>あま</sup>ごぜんたちいか  
 らせ給<sup>おこな</sup>いしかば、そのまゝ行<sup>おこな</sup>われけり。  
 去<sup>い</sup>ぬる文永<sup>かのとひつじ</sup>八年<sup>か</sup>辛<sup>つじ</sup> 未<sup>さ</sup>九月<sup>さ</sup>十二<sup>さ</sup>日の夜<sup>さ</sup>は相<sup>さ</sup>摸<sup>さ</sup>国<sup>さ</sup>たつの口<sup>くち</sup>にて切<sup>き</sup>らるべかりしが、いか  
 にしてやありけん、其<sup>その</sup>夜<sup>よ</sup>はのびて依<sup>え</sup>智<sup>ち</sup>というところへつきぬ。又<sup>また</sup>十三<sup>じ</sup>日の夜<sup>よ</sup>はゆり(許)  
 たりととどめき(多口)しが、又<sup>また</sup>いかにやありけん、さど(佐渡)の国<sup>くに</sup>までゆく。今<sup>き</sup>日<sup>よう</sup>切<sup>き</sup>  
 る、あす切る、といひしほどに四<sup>し</sup>箇<sup>くわ</sup>年<sup>ねん</sup>というに、結<sup>け</sup>句<sup>く</sup>は去<sup>い</sup>ぬる文永<sup>たいさい</sup>十<sup>さい</sup>一<sup>き</sup>年<sup>えい</sup>太<sup>たい</sup>歳<sup>さい</sup>甲<sup>えい</sup> 戊<sup>えい</sup>二<sup>ぬ</sup>  
 月<sup>げつ</sup>十四<sup>じゅう</sup>日にゆりて、同<sup>どう</sup>じき三<sup>さん</sup>月<sup>げつ</sup>二十<sup>にじゅう</sup>六<sup>ろく</sup>日に鎌<sup>か</sup>倉<sup>まくら</sup>に入り、同<sup>どう</sup>じき四<sup>し</sup>月<sup>げつ</sup>の八<sup>はち</sup>日<sup>にち</sup>、平<sup>へい</sup>左<sup>さい</sup>衛<sup>えい</sup>門<sup>もん</sup>尉<sup>じよう</sup>  
 に見<sup>けん</sup>参<sup>ざん</sup>して、やうやうの事<sup>こと</sup>申<sup>まう</sup>したりし中<sup>ちゆう</sup>に、今<sup>も</sup>年<sup>うご</sup>は蒙<sup>いち</sup>古<sup>じ</sup>は一<sup>いち</sup> 定<sup>じよう</sup>よすべしと申<sup>まう</sup>しぬ。同



じき五月の十二日にかまくら（鎌倉）をいでて、此山このやまに入れり。これはひとへに父母ふぼの恩おん

・師匠ししやうの恩おん・三宝さんぼうの恩おん・国恩こくおんをほう（報）ぜんがために、身みをやぶり、命いのちをすつれど

も、破やぶれざればさてこそ候へ。又賢人けんじんの習い、三度国みたびをいさむるに用いずば、山林さんりんにま

じわれといふことは、定さだまるれい（例）なり。此功德このくどくは定さだめて上三宝かみさんぼう、下梵天しもほんてん・帝たい・帝たい・積やく

・日月にちがつまでもしろしめしぬらん。父母ふぼも故道善房こどうぜんぼうの聖しやうりやう 靈たまも扶たすかり給たまうらん。

但ただ疑うたがい念おもうことあり。目連尊もくれんそんじや者は扶たすけんとおもいしかども母ははの青提しやうだいによ女がきどうは餓鬼道がきどうに墮お

ちぬ。大覺世尊だいがくせそんの御子みこなれども善ぜん星比丘しやうびくは阿鼻地獄あびじごくへ墮おちぬ。これは力のまやすく（救）

はんとをぼせども自業自得果じごうじとくかのへん（辺）はすくひがたし。

故道善房こどうぜんぼうはいたう弟子でしなれば、日蓮にっれんをばにくしとはをぼせざりけるらめども、きわめて

臆おく病びやうなりし上うえ、清澄きよすみをはなれじと執しゆうせし人なり。地頭景信じとうかげのぶがをそろしといふ、提婆だいば

・瞿伽利くぎやりにことならぬ円智えんち・実城じつじやうが上うえと下したとに居いてをどせしを、あながち（強）にを

それて、いとをしとをもうとし（年）ごろの弟子等ごしやうをだにも、すてられし人なれば後生ごしやう

はいかんがと疑う。但ただひとつ一の冥加みやうがには景信かげのぶと円智えんち・実城じつじやうとがさきにゆきしこそ、ひとつ一のたすかりとはをもへども、彼等かれらは法華經ほふけきやうの十羅刹じゆうらせつのせめをかほりてはやく失ぬうせ。後のちにすこし信ぜられてありしは、いさかひの後のちぎりきなり。ひるのともしび(灯)なにかせん。其上それうえいかなる事ことあれども子こ・弟子でしなんどいう者は不便ふびんなる者ぞかし。力なき人もあらざりしが、さど(佐渡)の国までゆきしに、一度もとぶら(訪)はれざりし事は信じたるにはあらぬぞかし。

それにつけてもあさましければ、彼人かのひとの御死去ごしきよときくには、火にも入り、水にも沈みしず、はしり(走)たちてもゆひて、御はか(墓)をもたゝいて経じゆをも一卷読誦じやくじゆせんとこそおもへども、賢人けんじんのならひ、心には遁世とんせとはをもはねども、人は遁世とんせとこそをもうらん、ゆへもなくはしり出いずるならば、末すえへもとをらずと人をもうべし。さればいかにをもうとも、まいるべきにあらず。但ただし各々おのおの二人は日蓮にっれんが幼ようしやう少しの師匠ししやうにてをはします。

勤ごん操そう僧そう 正じやう・行ぎやう 表ひやう僧そう 正じやうの伝教大師でんけうだいしの御師おんしたりしが、かへりて御弟子みでしとならせ給たまひし

がごとし。日蓮が景信かげのぶにあだまれて清澄山きよすみやまを出でしに、おひい（追）てしのび出でられたりしは、天下てんか第一の法華經の奉公ほうこうなり。後生ごしようは疑うたがいおぼすべからず。

問うて云く、法華經一部八卷二十八品の中に何物なにもか肝心かんじんなる。

答えて云く、華嚴經の肝心かんじんは大方広仏華嚴經、阿含經の肝心かんじんは仏說中阿含經、大集經の肝心かんじんは大方等大集經、般若經の肝心かんじんは摩訶般若波羅蜜經、双觀經の肝心かんじんは仏說無量壽經、觀經の肝心かんじんは仏說觀無量壽經、阿彌陀經の肝心かんじんは仏說阿彌陀經、涅槃經の肝心かんじんは大般涅槃經。かくのごとく一切經は皆如是我聞の上の題目、其經の肝心かんじんなり。

大は大につけ、小は小につけて、題目だいもくをもて肝心かんじんとす。大日經・金剛頂經・蘇悉地經等ちきよう、亦復またまたかくのごとし、仏も又かくのごとし。大日如來・日月灯明仏・燃灯仏

・大通だいつうぶつ・雲雷音王うんらいおんのうぶつ・是等これらの仏も又名の内に其仏の種々の徳とくをそなへたり。今の法華經まはも亦もつてかくのごとし。如是我聞によぜがもんの上の妙法蓮華經うえの五字は即一部八卷の肝心かんじん。

亦復一切經の肝心。一切諸仏・菩薩・二乗・天人・修羅・竜神等の頂上の  
しようぼう  
正法なり。

問うて云く、南無妙法蓮華經と心もしらぬ者の唱うると、南無大方広仏華嚴經と心も  
なむみようほうれんげきよう  
しらぬ者の唱うると齊等なりや。浅深の功德差別せりや。  
とな  
さいとう  
せんじん  
くどくしやべつ

答えて云く、浅深等あり。  
せんじん

疑て云く、其心如何。  
そのこころいかん

答えて云く、小河は露と涓と井と渠と江とをば収むれども、大河ををさめず。大河  
しようが  
つゆ  
したたり  
みぞ  
え  
おさ  
たいが

は露乃至小河を撰むれども、大海ををさめず。阿含經は井江等露涓ををさめたる小河  
つゆ  
しようが  
おさ  
だいかい  
あこんきよう  
せいこう  
ろけん  
しようが

のごとし。方等經・阿弥陀經・大日經・華嚴經等は小河ををさむる大河なり。法華  
ほうとうきよう  
あみだきよう  
だいにちきよう  
けこんきよう  
しようが  
たいが

經は露・涓・井・江・小河・大河・天雨等の一切の水を一滯ももらさぬ大海なり。  
つゆ  
したたり  
い  
こう  
しようが  
たいが  
てんう  
いったい  
だいかい

譬へば身の熱者の大寒水の辺にいねつればすずしく、小水の辺に臥ぬれば苦  
た  
み  
あつきもの  
だいかんすい  
ほとり  
しようすい  
ほとり  
ふし  
くるしき

がごとし。五逆謗法の大一闡提人。阿含・華嚴・觀經・大日經等の小水の辺  
ごぎやくほうぼう  
だいいつせんだいにん  
あこん  
けこん  
かんぎよう  
だいにちきよう  
しようすい  
ほとり

にては大罪の大熱さん（散）じがたし。法華經の大雪山の上に臥ぬれば五逆・誹謗・  
 一闡提等の大熱忽に散ずべし。

されば愚者は必ず法華經を信ずべし。各々経々の題目は易き事同じといへども、愚者と  
 智者との唱うる功德は天地雲泥なり。譬へば大綱は大力も切りがたし。小力なれど

も小刀をもてたやすくこれをきる。譬へば堅石をば鈍刀をもてば大力も破がたし。

利劍をもてば小力も破ぬべし。譬へば薬はしらねども服すれば病やみぬ。食は服

せども病やまず。譬へば仙薬は命をのべ、凡薬は病をいやせども、命をのべず。

疑つて云く、二十八品の中に何か肝心ぞや。答えて云く、或は云く、品々皆事に随

いて肝心なり。或は云く、方便品・寿量品肝心なり。或は云く、方便品肝心なり。

或は云く、寿量品肝心なり。或は云く、開・示・悟・入肝心なり。或は云く、実相

肝心なり。

問うて云く、汝が心如何。

答う、南無妙法蓮華經肝心なり。其証如何。そのしょういかん

答えて云く、阿難・文殊等、如是我聞等云云。あなん もんじゆ によぜがもん

問うて云く、心如何。いかにん

答えて云く、阿難と文殊とは八年が間、此法華經の無量の義を一句一偈一字も残さずあなん もんじゆ あいだ この むりよう ぎ ひとついちげ じ

聴聞してありしが、仏の滅後に結集の時、九百九十九人の阿羅漢が筆を染めてありしちようもん によぜがもん とな けつじゆう

に、妙法蓮華經とかゝせて如是我聞と唱えさせ給いしは、妙法蓮華經の五字は一部八卷によぜがもん

二十八品の肝心にあらずや。されば過去の灯明仏の時より法華經を講ぜし光宅寺のとうみようぶつ

法雲法師は、「如是とは將に所聞を伝えんとして前題に一部を挙ぐるなり」等云云。ほううんほつし によぜ まさ しょもん つた ぜんだい あ

靈山にまのあたりきこしめしてありし天台大師は「如是とは所聞の法体なり」等云云。りようぜん によぜ しょもん しょうたい

章安大師の云く、「記者釈して曰く、蓋し序王とは經の玄意を叙し玄意は文心を述しょうあんだいし きしやしやく いわ けだ じよおう げんい じよ もんしん の

ぶ」等云云。此釈に文心とは題目は法華經の心也。妙樂大師云く、「一代の教法このしやく もんしん だいもく みようらくだいし いちだい きようぼう

を収むること法華の文心より出ず」等云云。おさ もんしん い

天竺てんじくは七十箇国そちゅうみょうなり。総名がつしこくは月氏国。日本は六十箇国、総名は日本国。月氏がつしの名の内

に七十箇国乃至人畜珍宝にんちくちんぼうみなあり。日本と申す名の内に六十六箇国あり。出羽でわの羽も

奥州おうしゅう

の金こがねも、

乃至国の珍宝人畜ちんぼうにんちく乃至寺塔じとうも神社じんじやも、

みな日本と申す二字の名の内うち

に

おさま

撰てんげんれり。天眼てんげんをもつては、

日本と申す二字を見て、六十六国乃至人畜等にんちくをみるべし。法眼ほうげん

をもつては、人畜等にんちくの此こゝに死しし彼かに生うまるをもみるべし。譬たとへば、人の声こゑをきいて体たいを

しり、跡あとをみて大小おほいをしる。蓮はちすをみて池いけの大小おほいを計はかり、雨あめをみて竜りゆうの分ぶん齊さいをかんがう。

これはみな一に一切の有ることわりなり。

阿含經あこんぎやうの題目だいもくには大旨おほむね一切いっけつはあるやうなれども、但ただし小釈迦しょうしやか一仏いっぶつのみありて他た仏ぶつなし。

華嚴經けこんぎやう・觀經くわんぎやう・大日經だいにてちぎやう等らうには又また一切いっけつ有るやうなれども、二乗にじやうを仏ぶつになすやうと久遠くおん

実じつ成じやうの釈迦しやか仏ぶつなし。例れいせば華はなさいいて菓くわならず。雷いかずちなつて雨あめふらず。鼓つづみあて音おとな

し。眼まなこあて物ものをみず。女人にょにんあて子こをうまず。人ひとあて命いのちなし、又また神たましいなし。大日だいにちの真言しんごん

・薬師やくしの真言しんごん・阿弥陀あみだの真言しんごん・觀音くわんのんの真言しんごん等らう又またかくのごとし。彼かの經きやうぎやう經ぎやうにしては

・薬師やくしの真言しんごん・阿弥陀あみだの真言しんごん・觀音くわんのんの真言しんごん等らう又またかくのごとし。彼かの經きやうぎやう經ぎやうにしては

大王・須弥山・日月・良薬・如意珠・利劍等のやうなれども、法華經の題目に対す

ば雲泥の勝劣なるのみならず、皆各々当体の自用を失ふ。

例せば衆星の光の一の日輪にうばはれ、諸の鉄の一の磁石に値うて利精のつ

(尽)き、大劍の小火に値て用を失い、牛乳・驢乳等の師子王の乳に値うて水とな

り、衆狐が術一犬に値うて失い、狗犬が小虎に値うて色を變ずるがごとし。

南無妙法蓮華經と申せば、南無阿弥陀仏の用も南無大日真言の用も觀世音菩薩の用も一

切の諸仏諸經諸菩薩の用、皆悉く妙法蓮華經の用に失はる。彼の経々は妙法蓮華經の用

を借らずば皆いたづらのもの(徒物)なるべし。当時眼前のことはりなり。日蓮が南無妙

法蓮華經と弘むれば南無阿弥陀仏の用は月のかくるがごとく、塩のひる(干)がごとく、

秋冬の草のかるゝがごとく、氷の日天にとくるがごとくなりゆくをみよ。

問うて云く、此法実にいみじくばなど迦葉・阿難・馬鳴・竜樹・無著・天親・南岳

・天台・妙楽・伝教等は、善導が南無阿弥陀仏とすゝめて漢土に弘通せしがごとく、



慧心・永観・法然が日本国を皆阿弥陀仏になしたるがごとくすゝめ給はざりけるやらん。

答えて云く、此難は古の難なり。今はじめたるにはあらず。馬鳴・竜樹菩薩等は仏滅後六百年七百年等の大論師なり。此人々世にいでゝ大乘経を弘通せしかば、諸々の

小乗の者疑つて云く、迦葉・阿難等は仏の滅後二十年四十年住壽し給いて、正法を

ひろめ給いしは如来一代の肝心をこそ弘通し給いしか。而るに此人々は但苦・空・無常

・無我の法門をこそ詮とし給いしに、今馬鳴・竜樹等はかしこしといふとも迦葉・

阿難等にはすぐべからずへ是一。迦葉は仏にあひ(値)まいらせて解をえたる人なり。此

人々は仏にあひたてまつらずへ是二。外道は常樂我淨と立てしを、仏世に出でさせ給い

て苦・空・無常・無我と説かせ給いき。此のものどもは常樂我淨といへりへ是三。さ

れば仏も御入滅なりぬ。又迦葉等もかくれさせ給いぬれば、第六天の魔王が此ものども

が身に入りかはりて仏法をやぶり、外道の法となさんとするなり。されば仏法のあだを

ば頭こうべをわれ、頸くびをきれ、命いのちをた(断)て、食じきを止めよ、国こくにを追へと、諸もろもろの小乗の  
 人々申せしかども、馬鳴めみ竜りゆう樹等じゆは但ただ一二人いちににんなり。昼夜ちゆうやに悪口あつくの声をきき、朝暮ちようぼに杖木じようもく  
 をかうふ(被)りしなり。而しかれども此この二人は仏の御おん使つかいぞかし。正まさく摩耶まや経きようには六百年  
 に馬鳴めみ出しゆで、七百年に竜りゆう樹出じゆでんと説かれて候。其上そのうえ、楞伽りようが経等きようにも記せられたり。  
 又ふ付法蔵ふほうぞう経きようには申すにをよばず。されども諸もろもろの小乗のものどもは用いず。但ただ理不尽  
 にせめしなり。「如来にらいげん現在ざい猶多ゆた怨おん嫉し況きやう滅度めつど後ご」の経文は此時このときにあたりて少しつみしら  
 れけり。提婆だいば菩薩ぼさつの外道げどうにころされ、師子しし尊者そんじやの頸くびをきられし、此事このことをもつておもひや  
 らせ給たまへ。  
 又ふ仏滅後ぶつめつご一千五百余年いちごふひやくごにあたりて、月氏がつしよりは東かんどに漢土かんどといふ国あり。陳ちん・隋ずいの代よに天  
 台大師ていだい出世しゆつせす。此人このの云く、如来にらいの聖しよう教きやうに大あり小あり。顕けんあり密みつあり。権ごんあり実  
 あり。迦葉かしやう・阿難あなん等ごは一向いつごうに小を弘めみめ、馬鳴めみ・竜りゆう・樹むじやく・無著てんじん・天親てんじん等ごは権大ごん乗じつを弘  
 めて、実大じつだい乗じつの法華あらい経きをば或あるは但指ただゆびをさして義ぎをかくし、或あるは経きの面おもてをのべて

始中終をのべず。或は迹門をのべて本門をあらはさず。或は本迹あつて観心なし  
 といひしかば、南三北七の十流が末、数千万人時をつくりどつとわらふ。世の末にな  
 るまゝに不思議の法師も出現せり。時にあたりて我等を偏執する者はありとも、後漢の  
 永平十年丁卯の歳より今陳・隋にいたるまでの三藏人師二百六十余人を、ものもしら  
 ずと申す上、謗法の者なり、悪道に墮つといふ者出来せり。あまりのものくるはしさ  
 に、法華經を持て来り給へる羅什三藏をも、ものしらぬ者と申す也。漢土はさてもをけ、  
 月氏の大論師童樹・天親等の数百人の四依の菩薩もいまだ実義をのべ給はずといふな  
 り。此をころしたらん人は鷹をころしたるものなり。鬼をころすにもすぐべしとのゝし  
 りき。又妙楽大師の時、月氏より法相・真言わたり、漢土に華嚴宗の始まりたりし  
 を、とかくせめしかば、これも又さはぎしなり。

日本国には伝教大師が仏滅後一千八百年にあたりていでさせ給い、天台の御釈を見て  
 欽明より已来二百六十余年が間の六宗をせめ給いしかば、在世の外道・漢土の道士、日

本に出現せりと謗ほうぜし上うえ、仏滅後一千八百年が間、月氏がつし・漢土かんど・日本になかりし円頓えんどんの  
 大戒だいかいを立てんとたいうのみならず、西国さいこくの觀音寺かんのんじの戒壇かいだん・東国とうこく下野しもつけの小野寺おのでらの戒壇かいだん・  
 中ちゆうこく国大和やまと国東大寺とうだいじの戒壇かいだんは、同おなじく小しょうじ乘臭じゆうふん糞かいの戒がいなり、瓦石がしやくのごとし。其それを持たも  
 つ法師ほつし等は野干猿猴等やかんえんこうのごとしとありしかば、あら不思議ふしぎや、法師ほつしにたる大蝗虫おおいなむし、国  
 に出現せり。仏教ぶつぎょうの苗なえ一時いちじにうせなん。殷いんの紂ちゆう・夏かの桀けつ、法師ほつしとなりて日本うまに生れた  
 り。後こうしゆう周うぶんの宇文とうづ・唐ぶそうの武宗ふた、二たび世たに出現せり。仏法たも但今ただいまう失せぬべし。国もほろ  
 びなんと。大乘小乗だいじゆうの二類ふつしの法師ほつし出現せば、修羅しゆらと帝たいしやく・釈しやくと、項羽こううと高祖こうそと、一いっ国こくに並べ  
 るなるべし。諸人しよにん手をたゞき、舌したをふるふ。在世ざいせいには仏ぶつと提婆たいばが二ふたつの戒壇かいだんありてそこ  
 ばくの人々し死しににき。されば他宗たしゆうにはそむくべし。我師わがし天台大師たいたいだいしの立たて給たまはざる円頓えんどんの  
 戒壇かいだんを立たつべしふしぎという不思議ふしぎさよ。あらおそろしおそろしとのし（罵ののし）りあえりき。  
 されども經きようもん文分ぶんぶん明みやうにありしかば、叡山えいざんの大だい乘戒壇じゆうかいだんすでに立たてさせ給たまいぬ。  
 されば内ないしゆう証しゆうは同じおなじけれども、法ほつの流布りゆうふは迦葉かしよう・阿難あなんよりも馬鳴めみゆう・竜りゆうじゆ樹等じゆはすぐれ、

馬鳴めみやう

馬鳴等よりも天台はすぐれ、天台よりも伝教は超えさせ給いたり。世末よすえになれば、人の智ち

はあさく伝教はふかくなる事ことなり。例せば軽病けいびやうは凡薬ぼんやく、重病じゆうびやうには仙薬せんやく、弱人よわきひとに

は強つよきかたうど（方人）有りて扶たすくるこれなり。

問うて云く、天台伝教の弘通ぐづうし給わざる正しようぼう法ありや。

答えて云く、有り。

求めて云く、何物なにもぞや。

答えて云く、三あり。末法まつぼうのために仏留とどめ置き給う。迦葉かしよう・阿難あなん等、馬鳴めみやう・竜樹りゆうじゆ等、

天台てんだい・伝教でんぎやう等の弘通ぐづうせさせ給はざる正しようぼう法なり。

求めて云く、其形そのぎやう貌みよう如何。

答えて云く、一ひとつには日本乃至いちえんぶだい一閻浮提えんぶだい一同いっとうに本門ほんもんの教主きやうしゆ主釈しやく尊そんを本尊ほんそんとすべし。

所謂いわゆる宝塔ほうとうの内の釈迦多宝しゃかたほう、外そとの諸仏しよぶつ、並ならびに上行じやうぎやう等の四菩薩しほさつ脇士ききやうじとなるべし。二ふたつ

には本門ほんもんの戒壇かいだん。三みつには日本乃至かんどが漢土月氏しつし一閻浮提いちえんぶだいに人ごとにうちむち有智無智うちむちをきらはず、

一同に他事をすてて南無妙法蓮華經と唱うべし。此事いまだひろまらず。一閻浮提の内  
 に仏滅後二千二百一十五年が間、一人も唱えず、日蓮一人南無妙法蓮華經・南無妙法蓮  
 華經等と声もをしましらず唱うるなり。例せば風に随つて波の大小あり。薪たきぎによて火の高下  
 あり。池いけに随つて蓮はちすの大小あり。雨の大小は竜による。根ふかければ枝しげし。源みなもと  
 遠ければ流ながれながしというこれなり。周しゅうの代の七百年は文王ぶんおうの礼孝らいこうによる。秦しんの世ほ  
 どもなし、始皇ししおうの左道さどうなり。

日蓮が慈悲曠大ならば、南無妙法蓮華經は万年まんねんの外ほか未來までもながるべし。日本国の  
 一切衆生いっさいしじゆうの盲目もうもくをひらける功德くどくあり。無間地獄むげんじごくの道みちをふさぎぬ。此功德このくどくは伝教天台に  
 も超へ、竜樹りゅうじゆ・迦葉かしょうにもすぐれたり。極樂百年ごくらくの修行しゆぎようは穢土えどの一日いちにちの功こうに及ばず。  
 正像二千年しょうぞうの弘通くわつうは末法まつぼうの一時いちじに劣るか。是これはひとへに日蓮が智ちのかしこきにはあら  
 ず。時のしからしむる耳のみ。春は花さき、秋は菓このみなる、夏はあたたかに、冬はつめたし。  
 時のしからしむるに有あらずや。

わがめつど　のちのち　ごひやくさい  
「我滅度の後後の五百歳の中に広宣流布して閻浮提において断絶して悪魔魔民諸

てんりゆうやしやくほんだ  
の天　竜夜叉鳩槃荼等にその便りを得せしむること無けん」等云云。此　経文若しむな

しくなるならば、舍利弗は華光如来とならじ。迦葉尊者は光　明如来とならじ。目犍

たまらばせんだんこうぶつ  
は多摩羅跋栴檀香　仏とならじ。阿難は山海慧自在通王　仏とならじ。摩訶波闍波提比丘尼

いっさいしゆじようきけんぶつ  
は一切衆　生喜見　仏とならじ。耶輸陀羅は具足千万光相　仏とならじ。三千塵点も戯論、

ごひやくじんでん　もうご  
五百塵点も妄語となりて、恐らくは教　主　釈　尊は無間地獄に墮ち、多宝　仏は阿鼻の炎

じつぼう　しよぶつ　はちだいじごく　すみか　いっさい　ぼさつ　くるしみ  
にむせび、十方の諸　仏は八大地獄を栖とし、一切の菩薩は一百三十六の　苦　をうく

べし。いかでかその義あるべき。其義なくば日本国は一同の南無妙法蓮華経なり。

されば花は根にかへり、真味は土にとどまる。此功德は故道善房の聖　靈の御身にあ

つまるべし。南無妙法蓮華経。南無妙法蓮華経。

けんじ　たいさいひのえね  
建治二年（太歳丙子）七月二十一日

これ　しる  
之を記す

こうしゆうはぎいのこうみのぶのたけ　あわのくにとうじようのこおりきよすみさんじようけんぼうぎじようぼう　もと　ぶそう  
甲　州波木井郷蓑歩嶽より安房国東　条　郡清澄山浄　頭　房義城房の本へ奉送す

